中村鈴子著

名流百家

家政模範

東京 博文館蔵

98-77

帝國圖書館藏

支那模範

中村鈴子著

博文館藏版

明治
38-2-0
交内

題言

本書は閨秀の譽高き現今の名夫人に就て其の平常の趣味好尚を聞きたるものなり、抑も談話は耳に聞いて美妙の感あるも眼に見て平凡となる、蓋し音聲には抑揚あり、語氣には急緩ありて耳の趣味を飽かしめざるが故なり、著者此點に工風し、此點に發明す、俗談を寫して冗漫に陷らず、平話を寫して平凡ならしめず、恰も三寸其人に接して其の面を見、其の語を聞くの感あらしむ、是れ文に一家の妙工風あるにあらずんば克く此の如くなる能はざるべし。故に其の事は平話俗談に過ぎずと雖も、平話俗談の間に婦人の見たる哲學あり、宗教あり、文學あり、家事經濟あり、割烹あり、育兒衛生談あり、又衣服、髮飾、化粧談あり、社交の方面に亘つては婦人會、夜會、園遊會の噂あり、世帶話の中には味噌、醬油、野菜、薪炭

の買物論あり、亦深く浮世の義理、人情の機微を穿てる繼母論、寡婦論あり、更らに藝術の趣味談に入つては繪畫、小說、音曲、演劇の批評あり、上は翠帳の內事より下は庖厨の卑事に至るまで、社會各方面に通じて各種の特色を網羅す、正に是れ一幅の活畫にして當面婦人の性格、家門の規模歷然として讀者の眼底に迫り來る、吾人是を以て家庭の模範として世に紹介する所以、蓋し當世を稗益するの尠からざるを想へばなり

明治三十八年一月

女學記者識

名流百家家庭の模範目次

福門の部

毛利公爵の家庭……一
鍋島侯爵の家庭……一四
谷子爵の家庭……二七
岡部子爵の家庭……四五
加納子爵の家庭……六四
田中子爵の家庭……八九
平田男爵の家庭……一〇一

名士の部

兒島惟謙氏の家庭……一一九
天野博士の家庭……一三六
片山博士の家庭……一五三
三宅博士の家庭……一六七
島田三郎氏の家庭……一七九
高田博士の家庭……一九五
門野幾之進氏の家庭……二一一

軍人の部

大山元帥の家庭……二一八
樺山大將の家庭……二三〇
黑木大將の家庭……二五〇
伊東大將の家庭……二六八
木越中將の家庭……二八二
坂井中將の家庭……二九七
石本中將の家庭……三一三
伊集院中將の家庭……三二八
出羽中將の家庭……三四八

八、實業家の部

原六郎氏の家庭……三五九
廣岡新五郎氏の家庭……三七九
土居通夫氏の家庭……三八九
片岡直輝氏の家庭……三九三
小山健三氏の家庭……三九八
中橋德五郎氏の家庭……四〇〇
某會社理事の家庭……四〇二

目次終

名流百家家庭の模範

毛利公爵の家庭

名流夫人直話　中村鈴子著

品川停車場の少し西の北側に、木立の奥深く、御定紋の輝いた大名式の門を認めた時は、自づと襟を正しました、門番の翁に母堂の玄關を尋ねて老松を後に若檜の列んだダラ〳〵坂を上り、高い黒塗の机を据ゑられた玄關から、左手の應接間に通り、暫く松風の聲を聞て居りますと、御家來が出て來りて私を導き、長廊下を越て母堂の應接室へ參りました、母堂は少さい束髪に結ばれ、銀鼠の風通の單

衣に、焦茶繻珍の單帶を締められ、茶の平打帶留の金具は燦として光り、正しく合されし白絽の襦袢の襟は、透き通るやうな白い御顏に調和善く、ユッタリと椅子に掛けて居られましたが、つと立たれて一應の御挨拶あり、先づ記者の產地を問かれなど爲さいまして。

▲御留守居　當主は縣地へ參りて居て、此方は私一人で御座いますから、毎日何や彼やで日を暮しまして、別にこれと致して樂むと申す程の事も御座いません、イエ用事は始終縣地の方へ問合せまして取計らいますで御座いますから、心配は御座いません、唯だチョット急な事だけは相談に預ります位で。

▲旅行　御承知の通り此頃は方々の會へは出掛けますが、旅行は一躰不精の方で御座います、尤も一位樣(元德公)御存生中は能く御伴を致しました、昨年は一位樣の御年回で、墓參の爲め縣地へ出向きました、ハイ鎌倉の別莊へは寒暑に參つてあの近邊位は廻ります。

▲舟　舟は如何も可けません、ズット以前航海の節大層荒れて汽船の片輪が毀れた事が御座いますので懲りましたので御座います、鎌倉に一位樣が漁に御出掛の時は、私は御伴を斷はり、何時も御留守居ばかり致して居りました、此處(品川)の潮干なぞに參つた事は御座いません、併し海を眺めるのは大好で、歌の題などには面白いもので御坐います。

▲和歌　私なぞの歌は昔風で、唯今の御方々に御目に懸けるのはお耻しう御坐います。一位樣か大層お凝り遊ばして、醫者も御病氣に障ると申して御止め申した位でしたから、私なぞ御相手に拙な歌を拵へまして、直して戴いたり、致しますと矢張り精神を御遣ひになることゝ存じまして、暫く止めて居りましたから、サッパリ出來

ません、近頃據ろ無く頼まれましても、ホンの自分が景色や花を見たりして感じた事を、折に觸れて讀みます丈けで、今度斯ういふ題て一ッと申されましても、却々六ケ敷いので御坐います、興風會なぞへ出ますと益になると存じますが、年を取ると漸々根氣が無くなりまして、ッイ怠つて居ります。

▲新聞小説　新聞は種々事務所の方からも參りまして、殘らず讀みも致しませんが、必要の出來事丈をアチコチ見まして、後は女中達に讀ませて聽きます、以前私共は能く小説を見たもので御坐いますよ。一つは下情を知るためで御坐いますね、源氏なぞは唯優美一方ですが、京傳三馬の作や、一九の膝栗毛、馬琴の八犬傳と云ふ樣な種類の本は、世間の有樣が能寫して御坐いますから、昔はあんなものでも見なければ世間の事情がサッパリ判りませんでしたネェ、近頃の手輕い小説も讀て見る方が宜しいかと思ひます。

▲演劇　芝居も折々舊臣達から誘はれる事も御坐いましたが、先ア滅多には參りません、狂言を見るのは面白う御坐いますが、狹い場所で混雜致すのが嫌ひて、成るべくは此方へ聘んで見たなら無宜しからうなんぞと申して、能く笑ひます、壯士芝居は先達て初めて見ました、あれは江戸城明渡で毛利の事も筋に這入つて居りますから、如何なことを致すかと存じて行つて見ました、左樣で御坐いますネェ、手踊も昔は隨分見ました、定めて御咄に御聞きてせうが、祭禮の山車や、踊屋臺の御上覽が濟んで歸る時、舊屋敷櫻田の御屋敷の御物見へ出まして、見物致しましたが、其時に此方から所望して踊らせたので御坐います、其他の時は御狂言師を呼び寄せました。

▲音樂　私共には一向判りませんが、西洋の音樂も却々結構て御

坐いますネエ、琴は當節餘り致しません、唯側のものに彈かせます位で、祝日や誕生日には二本榎の孫達(男爵毛利五郎氏)の御子達)も呼び寄せ、女中共に彈かせて樂のて御坐います、此方でも以前は折々長唄の師匠や、常磐津の太夫を呼びまして義太夫は一段が却々長う御坐いますし、餘り氣がつまりまして、却て長唄や常磐津の方が氣が晴れるやうで御坐います。

▲歌留多萬歳猿曳　お正月には女中を大勢集めて歌留多の戰爭を始めます、彼の市中では唯今でも萬歳は參りますか知らん、それでは お猿も參りますネ、ハイ此方あたりへ參つたのはお猿萬歳で、お猿が裝束を着て御幣を持て踊りました。

▲圍碁　碁で御坐いますか、深い事は存じませんが好て御坐いますから、見て居ましても石の生死位は判ります。

▲花見　花は好て牡丹、薔薇、菊、秋草、其折々の花が庭に咲きますと、皆樣を御呼び申すのが樂しみて御坐いますので、別段に花見と申して遠くへ出掛けますのは好みません、昔の御花見で御坐いますが、上野などでは幕を張りて其中で花見を致し、周圍は山の御目附に賴んで、醉うた者などの狼藉を警護して貰いました、御茶屋へは勿論參られぬので、御辨當を幕の中で開くので御坐いました、尤も十二社の上の茶屋へは休んだことも御坐いました。

▲淺草の昔と今　よく昔の事を申しますが、淺草へ參詣の時も途中は鉄打の駕籠で少しも外は見えません、境内を歩くには女中が大勢て日傘を翳して、全躰を隱して仕舞ひますから、何かあるのかサッパリ判りません、よく錦繪に御坐いませう、彼の通りてす、唯今ては自分で蝙蝠傘を指て歩きますから、店に並んて居る品も見えて

慰みになります、昨年も當主の上京の折、一所に花屋敷の操り人形を見に參りました、パノラマは此頃日清戰爭のを見ました、面白いものでは御坐いますが、入る道が狹くつてゴタ〳〵して居て厭で御坐いました。

▲服裝　柄の嗜好と申して年寄りですから、別に洋服は宮中へ上る時と會へ出ます時又は寫眞を撮る時なぞに着けますが、種々幾通りも拵ひません、和服で出ますには昔の僻が失せないので、如何な粗末な品でも紋が付かないと氣が濟まぬ樣です、それで意氣な着物を着る氣になりません、緋の袴は惜しい物と思ひますが、これも時世で御坐いますかネエ。

▲髮飾　片はづして御坐いますか、あれは年を取つた女中の頭で私共はさげ下地に結つて居りました、若い女中は島田から縱吹、それから横吹、片はづしと云ふ順に變ります、唯今の女中達は御互に結ひ合つたり、又商賣人を呼んで致させたり爲ますが、私のは女中が結ひます、髮なぞモウ獨りて何うすることも出來ません。

▲食事　折々洋食を戴きますが、ドチラかと申せば日本料理の方が宜しう御座います、牛乳も醫者に申されましてヤット飲み習ひました。

▲手藝　針仕事は唯今申すと御耻しい次第ですが、纏つた物を縫ふことは耻のやうになつて居ましたので、ホンの慰みに桔梗袋なぞ縫つたり致す位でした、誠に惡い習慣で御座いましたネエ、ハイ御細工ものは箸差や紙挾なぞ種々拵へました。

▲武術　大名では馬と長刀丈を女子に敎えたもので御座います、長刀は極小供の時分人が使つて居るのを見て、よく其眞似をして揮

り廻して見ましたが、別に稽古は致しません、馬は少しも乘れませんん動物は嫌ですから。

▲飼養動物　一體動物を飼ふのは好きません、自由を押へ付けて憫然でなりませんから、但庭に他から貰ひました鶴が二羽居りますが、隨分古い物です、後で御覽遊ばせ。

▲茶道と活花　丁度私が修業盛りは世の中が騷々しい時分でしたから、是れぞと云つて仕込まれた藝も御座いません、手習の盛りも唯ゴタ〳〵と過して仕まいました、御茶や活花も矢張稽古が足りません、此方へ參りましてからも、御維新の頃一位樣は毎日議會に御出掛に爲り、御歸りも遲う御坐いますし、可なり心配が御座いまして、夜分もロク〳〵臥らない事が御坐いました。

▲山口言葉　十九の時に山口へ參つて、丁度十一年居りました、參りたては山口の言葉を家來に通辨させて稽古致したので御座います、彼方の言葉が分りませんと下々の事も解りませんし、又家來を使ふことも出來ませんから、如何も初めの内は少しも分りませんで困りました、東京でネエと申すことをナアと申しますよ、東京へ歸りました當坐は山口の言葉を使つて居りましたが、漸々又可笑しくなつて元に還つて仕舞ひました。

▲御庭　呼鈴を押して御家來を呼ばれ案内を御命じになつて其間に寫眞を探して置くと仰しやいました、記者は御家來に導かれて芝生の御庭先より柴折戸を出ましたが、枝垂櫻の間に在る雲形の池へ鐵網を被せられ、御話の丹鳥鶴二羽が居りました、朝晩に能く鳴くそうで餌の鰌は池へ入れて遣らるゝとの事です、これより御家來は一部々に就て懇切に説明の勞を取られましたが、やが

て芝生に傍て牡丹畑を一周りすると、北の方に土産神の八幡宮が鎮坐されてあり、兩側には松杉榎などの喬木が亭々と雲を凌ぎ、枝と枝と交り、葉と葉と摩れ合つて、品川沖から來る風に稷々と鳴るに相和して、亂蟬の聲も奏樂の心地が致しました、樹の下には人の身長ほどもある躑躅が列をなして歩いても〳〵容易に盡きず、滿開の時は紅白錯綜して錦の樣であると承はりました、途漸く盡きる所の左に萩叢あり、右に毛利家代々の畫像堂と靈祠と祭具庫が御坐いました、七月十六日は御祖先元就公の祭典日で、園遊會を催されたとの御事、是よりダラ〳〵低くなつた處が、外廓の生垣で、此處には陶製腰掛が幾個も配置されてあり、御臺場あたりの眞帆片帆から房總の山まで一目の中に集り、天開畫圖一即江山とか申す句も思ひ出されます、北へ折て松の梢に避雷針が結ひ付けあるを見ましたが、日本で避雷針の嚆矢であると承りました、御出入の植木師は重に麻布の仙華園主人、呉服は白木屋に御用を仰せ付けらるゝ事など承はりつゝ復び芝生に上つた時、お長屋の方と見えて乳母車を押しつゝ樹間を歩いて居ました。

▲元昭公御住居　御椽の段を上ぼりて西洋間を改築された元昭公御住居を拜見致しましたが、御書院、御納戸、御化粧部屋、御湯殿まで數知れぬ室毎〳〵をサッサと通る時、數年來希望した舊大名方の室内裝置は、眼前にある嬉しさに、鈍い眼は疲れ狹い腦は餘裕が無くなりました、夢心地で拜見し了つて以前の應接室へ戻り、御寫眞を拜借して御暇申上げましたが、馬繋ぎの後の杉から蜩の聲が聞えました。

鍋島侯爵の家庭

溜池の畔を通る毎に、城のやうな大厦を對岸に見上げますのは、舊佐賀藩主鍋島侯爵の御邸でありますが、初めて參上致した時は何の玄關から案内を乞ふて宜しいかと、車夫諸共に迷ひました、今度は二度目だけに迷ひませず、前に教へられた玄關に參り、白髪の朴直氣な玄關番に名刺を出しますと、暫くして御家來が來て導かれたのです、溪間の白猿、藤花に小犬を畫き分けた黒縁の幅の廣い衝立を据ゑた内玄關から、幾室かを通つて椽側なる應接室へ着きましたが、御家來はチヨツト奥へ參り出で來り、畳數十を横に連ね敷いた長廊下を歩み、鋭の様な板の間に出ました時、更に他の御家來案内を續ぎ、上草履を與へられて、階三つを下り、數十歩にして又十階程下り、迂折して奥の應接室に入り、金色燦爛たる置時計、陶製の人物及び動物を列べた竹製書棚を前にして、椅子に掛け恍惚として居ました處へ、直向手の入口より出で來られし夫人は、葡萄鼠の絹縮の單衣に白茶繻珍の幅廣き丸帶、白縮緬の帶揚に藤鼠の帶止を締められ、薄鼠無地縮緬の襦袢の襟に、純金蜻蛉形の襟止を程宜くなされ、前髪も鬢たぼもフツクリした小さい束髪に結ばれ、水の垂る様な黒髪は長い三日月形の眉や、豊に艶々したお顔と配合よく見受け上げました、一應の挨拶濟みて。

▲旅行

旅行は直大も好きで御坐いますから、大磯日光の別荘の外に、折々は鎌倉や逗子の邊に遊びに出掛けます、ハイ海は大好きで、以前は海水へも入りました、併し近年はトント入りません、夏

は大抵日光と定めて置て御坐います、旅行先では子供も私も歩く事に致し、棒名妙義などへも歩いて上り下り致しました、辛いながらも下駄で上りました。

▲舟　舟は好きで船暈をしたことは御坐いません、却て汽車より汽船の方はよい位です、一つは洋行の當時印度洋などを渡つて慣た故でせう。

▲和歌　和歌は下手の横好きで始終致して居ります、イエ樂みですか苦しみですか、判りません、（此の時記者は何時か何處かの御庭で大勢寫眞なされし中に丸髷姿の夫人を拜見致した事を申上げれば）彼れは確か松下太郎左衛門さんの御催して濱町の常磐屋の庭で佐々木信綱さんなどと一所に寫したのでせう、和歌の好きな者を御招びなすつたので（此の時ドーアを外からコツ〳〵敲くものありて茶菓を持つて來ました夫人は立つて西側の窓を開けられました。

▲新聞と小説　新聞は毎朝御飯前に讀むことに定めて置きます、最う色々何でも〇〇や〇〇のやうな惡口新聞も見て居ます、併し子供には新聞は見せません、時々妙な記事がありまして、不都合ですから……朝晩子供達の學課の復習を見てやります、夜分は八時半迄致させ、それから自分で書見を致します、小説は別莊へ參つてる内なぞは隨分讀むことがあります。

▲髪　女中共は仕方が御坐いませんが、私を初め娘達も髪結の手に掛らぬ事に致して御坐いまして、束髪は始終自分で結ひます、參り先きの都合で丸髷に結ひます時は、女中に致させます娘共も皆人手を借りません、梨本宮樣へ上げましたのは伊多利で持ちました娘で御坐いますが、丸髷でも獨りでお結ひになります……ハイ皆さ

んが珍らしいと仰しやいますよ。

▲服裝　年を取て居りますのに一躰構ひません方て、洋服も流行を氣にも致しませんが、唯だ外國人と交際する場合に餘り廢つたのては日本の耻辱と存じてネエ、帽子は今餘り大きいのは流行りません樣で、私など年寄りてすから、尙更大きいのは被りません、和服は何が好きつて矢張り時と場合ですから一定しません、娘達て御坐いますか、それは學校の規則て皆綿服て御坐います、卒業式や其他儀式の時は失禮と存じて紬か銘仙位着せてやります、（夫人は年寄年寄と仰しやるけれども記者には四十一二と見受けられました）

▲裁縫　娘達には早くから各自の衣服袴まて一切仕立てさせますので、又如何いふ處へ參るやら分りませんから、成るべく自分て始末するやうに敎へて居ります、私ですか其裁縫が大好きて、良人の

や自分のや娘共の積り物まて時々他家のチャンチャンなどを縫つて遣つたりなどして、何より樂みなので御坐います、ハイ細工物なども好きて。

▲勸工場入り　衣服小間物類は定つた時に取りますが、偶に慰みに勸工場に出掛けるのてす、ハイ地内（芝公園）のや新橋の千歳（博品館）なぞへ……それも一つは子供の爲て御坐いまして私處の子供は學校て算術が一番下手て、毎度々々先生に叱れます、これは全く價を知らないから迂濶なのてせうと思ひます、それて勘定を覺させる爲めに伴れて參り、鉛筆だの護謨、紙其他種々コマ〳〵した品を自分て撰ませて、家令に買はせ歸つてから、子供に代價を一々計算させて、漸々算術の智識を養ふ樣に至して居ります、一躰士族平民の子供は算術が上手て御坐いますが、我々の子供は一錢は何んな物だか、五

錢は何だか知りません、其筈ですよ、必要なものは家令からチャンと調へて差出しますから、勘定することがありません、それですから一月に一二度位宛勸工場の買物で、これは一錢ですよ、十錢ですよと、一々正札と品物とを照し合させて價を覺える樣に稽古させます、我々の仲間はドチラでも同じだろうと思ひますよ、種々又妙な物を欲しがりましてネエ、子供達の學校用品が他のお子さんと違つて居ると、彼樣のが欲しいと申しまして、鞄なぞでも態々粗い品を家令に買はせるのです。

▲音樂　私は元は生田を致しましたが、此頃はトント止めまして、雅樂の琴を主に致し、鍋島が琵琶を致すものですから、好く合せます、彼の牛込の雅樂講習所へ稽古に參りますが、怠り勝で……雅樂は極古い物で、上古唐土に行はれて日本に傳はり、昔は上主上より公卿までなさつたのですが、維新以來は華族の間に殘つて居るのです、琴の形は普通のと少しも異りませんので、唯だ爪が違ひます、左樣〳〵此間の番組がありました、御覽に入れませう、（夫人はツト室外に出でられ暫くして錦の爪袋と半紙に認められし番組とを持ち來られました）可笑しな爪でせう、これで中々〳〵強い音が出ますよ、許を取ると此通り此處が金になるのです、爪の形は圖の通り爪先が小さい竹で、指へ篏める處が張子の樣な物でありました、樂器は御承知の通り、笙、篳篥、笛、箏、琵琶、太鼓、羯鼓で、一越雙調と云ふやうに、却々〳〵面倒な物です、先日芝離宮に於て皇后陛下の御前に御催しになつた番組がこれです。

雙調　音取　鍋島直大侯
席田二段拍子　久我建通侯
大原重朝伯

鳥破　一返　東儀季照君　鍋島侯爵夫人
鳥急　殘樂　東久世通禧伯　綾小路有良子
蘭陵王一返　鍋島直大侯　園池公靜子
武德集二返　西園寺公望侯　室町公大伯

音取と云ふのが大切で、總ての調子を取つて行くのです、西園寺さんは琵琶の家で御座います、先頃參つた支那の學者に、雅樂を聽かせましたら、大層喜んださうです。

▲俗曲　以前女中の長唄の出來る者が居りました、娘共に運動の爲めに習はせましたが、それがなくなつてからは、態々黑人を聘んでまで習はせるにも及ばないと存じて、止めて了ひました、私です、か、好きて元は自分でも致しました、此節も女客の時は、お愛想に能く杵屋六左衛門を聘びます、ハイ下方も入れまして、相の手などは實に面白う御座いますネエ、義太夫も好きて大磯では土地の太夫……男でも女でも聘んで聽きますが、樂みなもので……

▲演劇　芝居は子供が御座いますから餘り參りません、慈善芝居位で……ソリヤ在來の芝居の方は好う御座いますけれども、川上の江戸城明渡のなんぞ、衣裳は粗ひし、御老人に伺つたら「實際彼樣な着付つてありません」と仰しやひましたよ、それにもう惡い場所で見せられて、閉口しました、大山さんなんぞ實に御氣の毒の樣な處で御覽でした。

▲茶の湯活花　花は池の坊、御茶は宗遍に習ひました、子供は皆松浦の方で稽古中です。

▲動植物　植物は何でも好きて、花が咲くと隨分遠くまで見に參ります、ハイ小金井へも、牡丹は金澤の泥龜へよく船で參ります、

彼處は百姓家ですが、泥龜の牡丹と申しては有名なもので、東京に彼樣な好いのは御座いません、動物は餘り好きませぬ、直大が少し小鳥を飼ひますが、却々世話なもので、それに何ですか可哀相で厭で御座いますよ、併し動物園には參ります、これも子供等の爲めと存じて、其他植物園でも展覽會でも子供を伴れて能く出かけます、成る丈け樣々の物を實地に見せて置かなければならぬと存じます。

▲書畫　書畫は主なる趣味とせらるゝ由にて此室に掛けられた伊太利の人物水彩畫二枚は、曾て明治美術會の參考品として出されたること、記者の記憶に殘つて居ります、記者は出でゝ前庭の一部分を寫生致さうとするとき、夫人は自ら椅子を持ち來られ、與へられました、寫し了つて舊の室へ戻りましたとき、夫人は珈琲へ牛乳をついで居られました、またもドーアをコツ〳〵敲くは御家來が名刺を差出して一客の來訪を報じたので、記者は長座を詫びましたが。……

ナアニ何時も御出の御方でアチラにイクラも御相手が居りますから……（と夫人は尙も留められました）。

▲食物煙草　一週に一度洋食の時に子供に食ひ方行儀を敎へます、私は何でも食べることは食べますが、ソリヤ日本料理の方が宜う御座いますとも、果物類は殊に林檎、蜜柑の類が大好きで御座います、煙草は喫みます、近頃彼地から歸つた方に聞くと、今は西洋では何處でも婦人が吸ふそうで、公の席では喫みませぬが、部屋の中では煙草を遠慮するのは二三年前の昔物と云つて、ドシ〳〵喫んで居るそうです、但英國人丈は別です、日本へ來て居る外國婦人が會話する際に、貴方上りますかと聞いて勸めるのですが、彼の太ひ葉卷て

はありませんよ、細い紙巻の方です、煙草も氣の結ぼれた時チョット吸ふと新しい考が出ます。

▲佛蘭西語　私は佛蘭西の方でモード、イリストリと云ふ週刊の繪入新聞を見て居ります、他に倫敦の新聞も取りますから、アチラの事情は大抵知れます、近來各國の御交際向には、佛蘭西語が通り相場になつて居りますので、宮中て御客を致す時には皆佛蘭西語なのです。

▲威嚴と愛嬌　夫人は笑はるゝ時に揃ふた細かひ白齒を僅かに現はして、深い愛嬌を漏らされ、談話を熱心に聽かれて、ヂーット相手の顏を見つめらるゝは、凛として威嚴を持たるゝのです、記者は毛利侯爵母堂へ御紹介を願つた序に、(女學世界に出て居る高輪御殿で舞はれた話しの事實如何を伺ひましたが、「ウッ〳〵そりや虛言ですよと夫人は笑ひながら手にせられたる水團扇を遽しく打ち揮られました。

谷子爵の家庭

勤儉力行の聞え高き谷子爵夫人を、市ヶ谷田町の御邸に尋ねましたのは、殘暑强き八月十四日の午前九時頃でした、質素な御玄關には、油圍の敗物を釘張りにされてあり、書生さんが恭々しく名刺を持ち行きて、應接室へ案内されましたが、樟の本箱數多と洋書棚とを列べ、大卓子に椅子五六脚を置かれ、小壁には夫人御手製の繭「小石丸」と、第四回勸業博覽會で得られた褒狀の圓額楠公父子訣別の圖、報國婦人會寫眞等を掲げられてあり、左手の御庭は幽邃な築山を後に

して、瓢形の大池に金魚潑剌たるを見、水際に咲き亂れた百日紅鳳仙花は朝風に戰いて紅色の小波風情面白く覺えました、夫人は白飛白の浴衣に茶博多の幅狹き帶を結びて出て來られ、初對面の御話振りも極質實で、隔て無く、冴え〳〵しい眉毛とハッキリした晴眸は凛々しい御氣象を現はし、座ろに熊本籠城の當時を偲ばしめられました、夫人は記者の唐突な質問にも拘はらず打寛いて生活談をお聽かせ下さつたのです、

▲大多忙　私は無學文盲で實に御恥かしいので御座います、それで愛國婦人會の評議員と云ふ事も、幾度か岩倉夫人や、佐藤少將夫人に御斷はりに參りましが、何と申しても御免し下さいませんから、餘儀無く連つて居りますが、耳はうとし、文字は見えず、何の御役にも立ちません、總會の時は評議員方は皆書付を御持參てすけれど、私は持つて參りません、持つて居つた處で盲の垣覗きてすから……、先づ其位の人間て、家事を働くより外に、何も用は御座いません、子は一人も持ちませんて、養子致しましたが、それも早く沒し、後に嫁も孫三人を遺して夭死致してしまひました、總領の孫(近衛歩兵少尉谷儀一氏)は最早や士官學校を卒業致し、當年二月戰地へ向ひ、末のは女子で十九歳になり、是も漸く下田の學校(實踐女學校)を卒業致しました、嫁が亡くなりましたので、私も隱居どころてなく、家事萬端殘らず引受けて居るのですが、昔から隙間なく働くのが好きな性質ですから、自分の勝手で忙しく暮して居る樣なものです。

▲花嫁時代　私の實家は下女下男をも使つて如何にか暮して居つたのですが、父親が嚴重な人て私が十二歳位から婚嫁後の心得になる樣にと申し、下女を廢して私と姉と二人に家事一切を任せました、

夫れで御飯炊きは申すまでもなく、料理から、交際、裁縫、機織、養蠶、其他女子の仕業は何によらず致しましたから、其御蔭で十九歳の時此家へ片付てから、小さい世帶を致すに困りませんでした、唯今でこそ斯樣なありがたひ身分になりましたが、私の參つた頃は郷國高知藩で五人扶持しか貰つて居りませんでしたから、却々樂どころじや御坐いません、良人は始終留守勝てはあり、私は男のする業まで致して一生懸命に働きました、實家では致したことのない百姓業までも……それから米麥を搗き、薪を割り、味噌醤油を造り、蠶を飼ひ、機を織して、何一つ買ふ物のない樣に致し、年中僅かの間も休むと云ふことはありませんでした、唯今以て朝起、夜業の止められないのは親の躾もあり、此時分の癖が浸み込んだ故て、あり難い事だと思つて居ります、昔を考へますと、一日でも贅澤な心を起しては濟まぬと存じ、良人も御承知の通り、質素な人ですから、少しも奢つた生活向は致さぬので御坐います。

▲夙起夜寢　昔から夏冬共大抵四時に起きます、私は十一二の時父親に申し付けられて以來、一遍でも起された事は御坐いません、奉公人を起したことも御坐いません、大抵蠟燭二本位燈して、可成廣い此坐敷を拭き掃き致し、時に據ると御飯まで炊くことがありました、餘り早朝から私のゴツ〳〵するのを良人が厭がりまして、其樣にすると下女が迷惑するから止めろと申します、併し奥さんが朝起だから勤まらぬとて暇を取つた下女一人もありませんから宜いじや御坐いませんかつて、笑つたのず、其後脇腹の赤兒を受取つて世話しましたが、私が起き出ますと泣きますので、思ふ樣に朝の働きが出來無くなり、九年以來は餘り早く起きない樣になつたのです、

夜業はズット昔から休みません、子供の着物など、矢張私が縫はなければ格好がシックリ出來ませんから……、此頃は報國婦人會のシャツを宅へ持つて參り、孫女と縫つて居りますが、私は十一時まで致すので、孫女を先に寢させることも御座います、「汝が五枚縫ふなら、祖母さんは十枚も縫はにや氣が濟まんわと申しましたのですよ、アハ、、、イエ最早六十一ですから根氣が大分衰へました、朝起は癖になつて居るので、イクラ夜業しても四時にはチャント目が覺めます。

▲食膳の費用　良人は食膳に少しも構いません方で、豆腐さいあれば何も入らぬと申します、此頃は煮る世話もありません、私なぞ漬物さへあれば何も入らぬのです、御膳は麥飯で、別に乳だの卵だのと云ふ滋養品も定めては用ひませぬが、身躰は働く故か至極丈夫で御坐います、時々極輕い腸加答兒を起すことが御坐いますが、此頃通りお灸で療します、(夫人は腕をまくりてお灸の跡を示された)良人は御酒を二合宛飲みますが、孫が出陣致した日から、一合に減らしました、外出などいたして疲れて戻つた時には、最少し上つたらと私が勸めましても、否少しても量を增せば濫になると申して、決して一合より多く用ひません。

▲米麥　唯今は六人の家族に書生が六人、車夫が二人、下女が四人、都合十八人で御坐います、左樣ですネエ、米が一石七八斗、麥が五六斗要りませう、是も一度に澤山買ひ置たり、宅で搗て見たり、致しましたが、澤山あると粗末に取扱ますし、宅で米を搗くと小米が多く出來ますので、却て損て御坐います、それも極小勢の家で、手搗に致せば損は無いのですが、人に致させるのは萬事加減が違ひ

ますから、種々場合に應じて考へなけりやなりません、麥は身體に極宜しいが、此節報國會へ出る御辨當は朝能くさまして結びにいたし、梅干を入れて持つて參るのに、お昼には少し臭ひが付いて、心持が惡いので、勿躰ない譯ですが彼方で御辨當を取つて居ります。

▲野菜　野菜は唯今一ヶ月に二十圓位求めます、ズット以前人數が少い頃、一ヶ月十圓程要りましたので、野菜に十圓と云つては大きい方だからと存じて、農夫を一個月三圓の給料で雇つて、畑物を作らせ、澤山出來ることは出來ましたが、矢張作つた外に十圓要りました、何故ですかサッパリ分りません、けれども十分あれば粗末にしたり、又チョイ〳〵引け道もある故でも御坐いませう、斯う云ふ次第で一向經濟にもなりません、農夫は廢して仕まひ、今は車夫に致させて置きますが、私が毎日見廻らなければ茄子や胡瓜がイクラ實つて居つても、其儘捨て置くのが多いので、遂には鳥に啄かれたり、腐つたり、勿體ない事ばかりで御坐います、過日も畑を見廻つて「此處では唯野菜に花を咲かせて樂むのです」と良人に話しました、アハ、、、併し午蒡など掘りたては味が別段で迚も水に幾日も漬けた八百屋のとは較べ物になりません、ハイ澤庵は十樽ほど漬けます。

▲茶　御茶も畑に造つて、一番も二番も摘まず、悉皆番茶に製して仕舞ひますから、其番茶の薫りと味は却々宜しいのです、過日も供待の部屋で客の車夫が辨當をつかう折、土瓶のお茶をしぼつて後の茶殼を箸で取り出して食べて居つたそうです、宅の番茶は全つく茶殼でも旨ひのでせう、一ヶ年に大抵二十俵位取りまして、これだけを一年分に用ひます、茶殼は乾して貯へ置き枕の中へ入れさせま

す。

▲味噌醤油、　味噌も醤油も以前は製つても見ましたが、國で製つたのは何だか手加減も違ひ、思ふ樣に出來ませんから止めました、ハイ醤油は月に二樽程も用ひます、炭薪も元は二三百圓位づゝ一度に買ひ置きましたが、矢張り粗末になりますから、必要だけ入れます、焚付は主に宅の桑の枯枝を用つて居ります。

▲召使の役割給料　一番年を寄つたを取締と致し、御飯焚、仲働、小間使、各一人ですが、仲働には機も織らせ、又養蠶の手傳など致させます、給料は取締が三圓、他は二圓五十錢、盆と暮は勿論間にもちよい〳〵氣を付けてやります、髪は近頃皆束髪に致し、風呂も宅で沸てますから、小費は鼻紙と郵便錢位でせう、庭の手入も植木屋を呼びますと、二三日で十圓や十五圓は取りますから、特に當年なぞ此時節柄、大層な事はお廢止にして車夫に庭の手入を致させます、此庭は元と切株ばかりで、彼の松の外は何一つ無つたのを良人が皆植たので御坐います。

▲臺所の注意　臺所は始終氣を付なければ無駄な費が出來ることは何の位だか知れません、澤庵の中央ばかり用つて後先を澤山塵溜へ棄てたり、竈の下の焚き落しが一ぱいになつて居ても、火消壺へ入れずに灰にして了つたり、薪が燃え下つて竈の口元で上向になつて居るなどは、毎々で御坐います、それからコップや茶碗など、能くこはれますこと、桶の中へ入れたばかりで割れました」と申しますが、平素大きな笊の中へ一ぱい入て、ガチヤ〳〵取扱ふので、自然龜裂が出來るので御坐います、二三十錢の茶碗で、同じ樣にこはれては堪りませんから、……ツイ過日も小刀を半ダース求めたのが、二本

しか殘つて居りません、小刀や肉叉は偶にビフテキなど拵へた時用ふだけだのに如何して失つて了ふのか、煮ても燒ても食べられるものぢやなしつて申した程ですが、先づ斯樣な鹽梅で少しも心は許せません、「汝達は私は客嗇で小言を言ふと思ふが、汝達も緣付てから隨分始末を心掛けねばならぬから、我身の爲めと思ふて氣を付けなされと」申し聽かせて居りますが、「貴婦の樣に嚴ましく仰しやると奉公人が後てベロリと舌を出しますよと御注意下すつた方が御坐います、良人が少しも小言を申しませんから私一人が惡まれ役ですアハ、、、。

▲井戸　此家は舊から井戸の多い屋敷で畑にも二つあり、臺所にも柄杓で吸んで用へるのがあります、雜水井戸を合せると八個もありませう、宅の畑は昔大久保彥左衞門の邸跡であつたのですが、其處にある埋つた井戸を私が見付け出して、井戸屋に掘らせた所、大きな漆塗の瓦を掘り出しましたが、其瓦には金で葵の紋が付いて居たので、多分拜領の瓦であつたらうと存じました、井戸は皆水の性質が極宜いので、上水を引かないで濟むのです。

▲養蠶　養蠶は毎年致して居りますが、大抵種子紙三枚で三斛位の繭が取れます、織ると染るのは京都へ遣りますが、白縮緬一疋が三四圓位、風通御召が六圓位で出來ます、それですから夫の袴羽織から、娘の禮服まで皆宅の繭から作りますので、呉服類を買ふことは御坐いません、近頃は宮樣(常宮周宮兩殿下)が御熱心に養蠶を遊ばしますが、種子紙は谷の婆のが宜いから貰へと御意遊ばしますが、實に有難い事と存じます、大抵半枚位差上げまして、五六斗位御取り遊ばすのですが、矢張り京都へ御遣して御常着を御織せに成りま

す、當年は養蠶の御次の間で繃帶卷を遊ばしたので、消毒藥の香が蠶に障つた爲ですか、結果が御惡かつた樣に承はりました、私共の桑畑はチョット千坪程もありましたが、白山に居つた娘夫婦の住居を此桑畑の處に建てる爲めに、七百坪ばかりの地所を塞げて桑が不足になりました、當年は會(愛國婦人會)のために養蠶を致さうと存じて、切通しの岩崎へ參り、其話を致した處が、是非私處の桑を遣つて呉れと申されたので、私も大喜びて仕上げ、繭悉皆を三十七圓に賣り拂ひ、早速愛國婦人會へ持つて參りましたが、岩倉樣も佐藤少將も大層御喜びて、受領書を下されました、岩崎への禮は總裁の印の捺つた有難い受領書を見せて喜ばせるのが何よりだと存じて居りました。

夫人は記者の請ひを容れて後園の養蠶室へ案内されましたが、宏濶堅牢な三階造りて桑畑の側に立てられてあり、内に入れば棚や籠を數多立て掛け、又は積み重ね、自から專門家の規模が備つて居り、燭臺四五脚も一隅に片付けられてありました、夫人は團扇を用ひながら話さるゝやう、

室は此通り締め切つて汚う御坐います、此室を建てたのは確か良夫が歐羅巴から歸つた年でした、それまでは彼方の坐敷で致したのですが、丁度六月蠶の忙しい時歸つて參ると云ふので、此室を建てました、これ丈の家を平屋に致せば稅が大層ですから、私が考へて三階にしたので御坐います、左樣家屋稅だけでも大分掛ります、總べての稅で三百圓ばかりになりませう、則も十個所ありますので、衞生組合とか申して白い粉を撒きに參るので、一ヶ月壹圓二十錢程取るのです、繭の忙しい時には私は此處に詰め切りて、握飯を食べて

居ります、成るべく廃れ物のない樣に、此蠶籠の古い毀れは畑の圍などに使ひ、蠶の流れや紙屑の賣拂ひは下女の所得としてあります、

尙數々の家政談をなされ、記者は一々感じ入りて、元の御坐敷へ歸る時、御主人の書庫の前を通りましたが、此頃は毎日御自身蟲干を成され、御坐敷一抔書物で埋ること、夜半まで讀書に耽けらるゝことなど話されましたが、御勝手口を入ると年若の御女中が布團地を織つて居りました。

▲機　常着や布團地は唐糸を買つて私や下女が織ります、機屑も纏めては繋いで織りますと丈夫な布が出來ますよ、發燄の時働く着物は紺と白の手織縞の筒袖で、私が先へ立つて着かるゝのです、今年は安上りに藍と白の辨慶を織つて着ました、彼の紙布織ですか、彼れは鄕國では原料の紙の薄い軟かひのを漉いて賣つて居ります、

チョット奇麗ですが、直に角々が切れますネ、山内侯爵の御幼少の頃私が暫く御預り申して居りました、其頃御手習の反古を安井(息軒)先生の夫人が頂いて、紙布の下拵ひを致しかけ、死亡れる時、是非私に織つて呉れとの遺言でしたから、私が織りまして敷布團の片皮に附け、大切にして居りましたが、最早や切れて仕まひました、

今昔の興ある御話に聞き惚れながら令息の御部屋の前を通りましたが、此室には御主人御夫婦の絹繪が掲げてありました、これは御夫婦が熊本籠城を出で、直に撮影された御寫眞に據て畫かれたものと話されました他に御主人洋行中の肖像(原田直次郎氏畫と、安井息軒先生の畫像が掲げられてあり、武者人形の玩具も床の間に列べられてありましたが、今年は玩具を買つてはならぬと、夫人は令息に申付けられたとの事です。

▲此邸が何より一番好き　此通り坐敷には構ひませんので、良人が歸朝の際、官宅へ引越せと御勸めの方もありましたが、何故か私は此穢い邸が大好きで、官宅は御斷はり申したので御坐います。

▲旅行中の御仕事　伊香保や箱根へ參る時には、仕事を澤山持つて參るので、逗留中は麻を裂いたり、靴足袋を繕つたり、小布を綴て袋を拵へたり、致して居ります、平生如何な小さな布でも、溜めて置き、三角や四角に綴ぎ合せて大きな袋に幾つも拵へ、人樣に上げ、又は女中共が買物に行く時持たせてやります、風呂敷のやうに物を落す氣遣ひが無くつて、極便利で御坐います、縮緬の耳も溜めて置き、ほごして繼ぎますと、丈夫な反物が織れます、旅行の時汽車の中でもこんな耳などほごすことを致しますよ、隙なく何か仕事を致したいのは、親の敎が深く浸み込んだ故で、私は最早死ぬまでこれを徹そうと思つて居ります、熊本籠城の時なども、シャツを洗つたり軍服を繕つたり、御飯拵へをしたり、五十四日間一日でも休んだ事はありませんでした、

夫人は人の噂に違はずと申すよりも人の噂に幾倍せる忠實勤儉力行の美德を備へられ忠實勤儉力行の化身と申して宜しい位です、而して其御話は光明正大磊々落々直ちに胸襟を披瀝されて秋毫も修飾が無いのですから、餘り露骨の樣に感ずる節もありますが、聽いて了つて清々した心持になります。

岡部子爵の家庭

岡部夫人抵子は加賀宰相贈從二位前田慶寧侯の第五女にして、夫人の姉

君は實に有栖川宮妃慰子殿下なり、夫人の誕生は慶應三年五月にして、
齒岸和田藩主岡部長職子に嫁したるは明治二十五年なり、其眞率にして
挾む所なく、階級を忘れて善く交るは交際社會の歎美する所。

春は麥畑の雲雀の上下する所、西南の空遙かに富士の殘雪を眺め得らるゝとは、高田千登世町なる岡部子爵の邸で御坐います。高田の砂利場を上り切つて、雜司が谷街道へ出ると、直に同邸ですが、三人の植木屋が玄關脇の「かなめもち」の刈込をして居りました、案内を乞ふて、玻璃障子を開け放して清々とした應接間へ通されましたが、御庭先の赤松や、短葉松から大久保、中野の森迄濃く、淡く、畫かれた樣な自然は、快活なパノラマを見て居る心地が致しました、床は高麗縁の薄べりを一杯に敷きつめ、障子の内側に萌黃色の縁を取りて總の下つてる公卿住居式の御簾を、幾つも捲き上げ、眞鍮の環で止めてありました、椽と向ひ合た出入口にも、矢張これと同樣の御簾を垂れた、大きい架燈口があつて、其下に長椅子を据ゑ、次に蒔繪の書棚を置かれ、書卷、國華など許多積み重ね、ピアノ、洋風書棚など順次、和洋折衷的に飾り付けられたのが、如何にも手際に見受けられました、忽ち見る右手の芝山の陰から、白縮の浴衣に赤メレンス鹿の子のシゴキを結び下げ、麥藁帽子を被られた八歳と六歳位の令嬢が胡蝶を追ひつゝ、小走りに上り來られしを、其後から女中も現はれて、何事か笑ひ興じて、やがて一同奥の御部屋へ入られた樣でした、此時丁度出て來られました夫人は、新月の眉薔薇の唇、水際の立つた艶々しい生際、本統に恍惚する樣な御樣子、濡羽色の髮を無造作に結ばれた束髮に、金製の小さい菊釵を挿され、細かい堅縞の白上布に、小豆色一本獨鈷の紹と支那黑緞子の打合帶を

結ばれ、薄い藍鼠に白く秋草を拔いた繻絆の襟と、白縮緬に墨繪の紅葉を染め出した帶揚が一層瀟洒に見上られ、素足に鼠羅紗の上靴を穿いて、椅子に掛けられました、偖て御話は……

▲育兒　小さい子供が澤山て御座いますから、明けても暮れても子供の世話斗りて、何を致して樂む暇も御座いませんて、自然嗜好と云ふものもなくなりました、私の持ました子供は男子が四人、女子が四人、總領が十一歳、一番下が今年生れた計りて御座います、成るたけ自分て育てゝ見たいと思ひまして、乳母は置かずに私の乳て育てます、尤も私の乳は細ふ御座いますから、生れると直ぐ牛乳を少しつゝ飲み習はせて、乳が出なくなると、牛乳ばかりに致します、小さいのを手掛ますうちは、減多に餘所へも出掛られませんが、據ろ無く出ます時には、殘らず置て參ることに極めて御座いまして、子供も決して後を追ひません、みんなズラリと玄關に並んて、行つていらつしやいと申して居ります。

▲子供の衛生　同じ樣に機嫌よく遊んて居る樣ても、毎日氣を附けなければならぬのは、汚いお話してすが、便通て御座いますよ、これさへ毎日定つてあれば、安心てすが、二日も滯つたら捨てゝ置かれません、大勢の中には先天によつて種々な持病が御座いまして、十一歳の男子は頭の毛が延びると直に咽喉病を起しますが、一月に二度宛刈り込んて置きますれば、無病なので御座います、次は又腸胃病が僻てすから、秘結すると灌腸を致してやるのて御座います、六歳より上の子供には毎日怠らず水浴を致させますが、其爲か風を引かないのは不思議て御座いますよ、パイ水浴は夏から慣らしまして。

▲醫者　チョットした事に醫者を呼ぶのは厄介で御座いますし、醫者も此方で聞く通りな返辭をして何だか張合が無い樣ですから、大抵出來る丈の事は致してやります、イエ功者と申す次第では御座いませんが、始終手掛て居ますと身躰の樣子が判るもので御座います、尤も怪我などは仕方がありません、先頃女の子が腕の骨を違ひました時には、取敢へず繃帶丈は致して直に佐藤(三吉)さんに願ひましたら、瞬間にスッカリ元の通りに御治しなさいました、各自の子供に人は附けて御座いましても、夜分など時々氣を附けてやらんと寢冷を致しますし、隨分世話な事で御座います。

▲食物　時々は子供に西洋料理を食べさせますが、一躰は粗食に致して居ります、主人も子供には粗食の方が體の爲めに善いと申します、男の子は兵隊にも出掛けなければならず、女の方は成長の後緣あつて如何な家へ片付かなければならないとも申されませんから、却々贅澤な癖は附けられません。

▲衣服　祝ひには據ろ無く拵へて着せますが、平常は一切粗服と定めて置きます、あの改良服で御座いますか、私は大嫌ひで御座います、只今の袴もモウ一息ですネ、此袴に就て過日加納さんの奥さん(加納久宜子夫人)が新聞にお書きになりましたが、私も少し考へて居る事が御座います、未た實驗は致して見ませんから判りませんが、お話だけ一寸致しませう、一躰袴は脛の現はれる心配がなく、活潑に歩けて子供には至極結構ですが、胸の所へ幅の廣い長い紐を幾重も〳〵卷きつけますのが、衞生上宜しく無いと思ひます、それで此紐を廢して緣に致し、腰の所で一つ廻した丈にして、丁度洋服の下着の樣に、フークを二つばかり附けた物で留めましたなら、伸縮も

自在ではあるし、胸も引締めず、又無益な長い紐がなくなれば、呉服も少して出來ます、裁縫も隨つて手輕て、經濟上からも、餘程便利だろうと存じますが、如何な物ですか、是から拵へて見やうと思つて居ります、靴は大賛成て、何處の運動にも靴を穿かせてやります。

▲復習　漸々大勢になりますと私ばかりでは行屆ませんし、乳呑子を抱へて居つては思ふ樣に爲て遣られませんので、男女別々に教師を招んで頼んで置きます、男の教師は此頃チョット歸國して居りました、十九歳になる長男(先夫人の令息)が面倒を見て呉れます、御承知の通り緣付(日下義雄氏へ)ましたの共義理ある子供が三人も御座いますが、皆性質の善いものばかりて、私に深切になすのは申すまでもなく、小さい弟や、妹をそれは〳〵優しく致して、學校の世話なぞ親も及びません程て御座います。

▲新聞小説　新聞は種々參りまして、ホンのチョイ〳〵見る位がヤットて、あとは主人の讀むのを聞く位の事て御座います、小説は元から大好て、隨分凝つた者て御座いましたが、讀み掛けると夢中になつて、何も彼も御留守になりますので、只今はチョットも覗かない事に致して居ります、ハイ誰の作ても見ましたが、一番好きだつたのは涙香のでしたよ。

▲書畫　和歌も畫も此頃はシッカリお廢して御座います、畫は不幸にして師匠が四度も變りましたから可けません、最初は道畫きの環翠、次は渡邊小華に就き、其次は國の者で、一番末に熊谷直彦に學びました、直彦さんの畫は寫生派て御座いますネ、小兒の時分學科の中て一番好きてあつたのは畫て御坐いまして、米庵の後の、萬

庵に習ひました、毎朝早く起きては大抵二百枚づゝ大きい字や小さい字を缺さず書きました、此頃の學校の習字は初めから六かしい字を教へて、又パッタリ止めて了ふのですがあれでは困ります私は出來もしないで斯ふ申すと甚だ失禮ですが近頃御婦人には御名筆がありますけれども、御男子方には御能書の方も滅多に無い樣ですネ、宅の子供も小學校を卒業したら少し習字を勉強させなければなりませんと思つて居ります。

當年五歳になるゝ圓く太られた可愛令息が最前から此室に來られ椅子の上に登つたり、降りたりして遊んで居られましたが、此時夫人の膝にもたれて主客の顏を眺められたのは、如何にも無邪氣で氣高う御坐いました。

▲お話　當節の子供は種々の話をくどく聞きたがる樣子でして、餘り幼少の内なぞは腦に害がありますから、成るべくお話を爲て聽かせません、それでも子供は好く加減に質問して、智識を開くの割合熱心なものですネ、八人が八人顏の變つてる通り、皆氣象が違つて居まして、親の方にも自然氣が合ふと合はぬとがありますれども、斯んな愛憎は注意して腹の中に仕舞ひ込んで、何の子も同じ樣に致して遣ります、ハイ此子は末の方ですが割合に鷹揚な性質ですよ。

▲音樂　ピアノは好きで折々彈きます、子供も私に似て音樂好きで、矢張ピアノを彈きますよ、琴は山木に習ひましたが、最早暫く彈たこともありませんので、スッカリ忘れました、今に娘達が稽古を始めましたら復習て遣る位な事は出來やうかと思つて居ます。

▲舞踏　舞踏會はスッカリ廢りました、此頃小學校の遊戯の中に舞踏の樣な事を致しますネ、運動には好う御坐いましやう、在來の

踊りもあれて猥褻な詞さへ無ければ可いものだと思ひます。

▲茶の湯　お茶も花も習ふことは習ひました、ハイお茶は石州から宗和に移りまして、私は此茶の湯が大嫌ひなのです、行儀と申しても茶室の中ばかりの事で外へ出たら矢張不行儀ては何にもなりません、それに態々狹苦しい部屋に閉ぢ込めて、活潑な精神を壓へて仕まうんですネ、一躰あの手つきが氣に入りません、彼んな不具の樣な手眞似を子供に敎へて何の益になりませう、是から社會に出る者にはホントウに無用の長物ですね、女禮式も餘り凝つて偏ると交際に不都合だと思ひます、彼の女禮式の先生なそ始終斯樣な風て(と兩袖を合され女禮式先生の身振宜しくあつて)私の眞似が可笑つて皆が笑ひますが、融通の利かないとあればあれつきりの事ですネ、併し女の子は疎暴になつてもいけませんし、只今の女子敎育ほど六ケしいものは有りません。

▲學校　幼稚園は此頃止めさせました、大きいのは學習院と華族女學校へ通はせますが、男の子は大抵歩いて通はせ、女の子は車て送り迎ひだけ致して、學校へ附けては置きません、附いて居るものは暇て困りますし、學校の方ても迷惑致します。

▲丸髷化粧　私が丸髷に結ひます譯は、この子供の多いのに毎朝〈束髪に結ぶのも隨分厄介て御坐いまして、丸髷なら三日や四日はチャンとして居りますので、却て世話が無いからです、それのみならず急に外へ出掛ける折にも撫て付が利きます、衛生には惡ひとも申しますが、併し鬢の緩まつた間から空氣が這入つて割合に凉し

う御座います白粉は嫌ひてあれはドウも可けませんネエ、併し日本の風習としては身嗜みの一つてすから、全然廢す次第にも參ります

まい、私なぞも他出の時據ろ無い場合には白粉に代用して害のないものを付けます。

▲令息の日本海一週　又長男は學習院の學生で當年十九歳になりましたが、誠に旅行好ですから、夏季休業中には成るべく旅行を致させます、昨年は單身寫眞器械を肩にして內地を周遊しましたが、本年は日本海一週を思ひ立ちまして、矢張り單身で出掛けました、全體上流の子弟は夏期休業には溫泉とか、海水浴とかて、隨分贅澤に遊ぶ風習でありますが、日本海一週旅行などを致すことなどは、精神上から見ましても、又身體上から見ましても、實際利益となる事と思ひまして、喜んで出發させました。

▲旅行　御覽の通り田舍住居て見晴しは宜しう御座いますし、涼しい事と申したら土用中ても風のある時は、此處の障子を閉めます位ですから、態々大騷ぎして遠方へ避暑に出懸ける必要は御座いません、旅行なぞ窮窟な思ひをするより、家に居た方がイクラ氣樂て宜いか知れないつて、皆左樣申して居ります、唯だ海は珍らしう御座いまして、大森位へは時々出掛けます、昨日も大勢連れて參つて終日遊んで歸りました。

▲洋行中止　公使の時參るばかりに仕度致し、連れて行く子供と、預ける子供とをチャンと定めて、萬事の準備が出來ました所が、御止めに成つた方が復行らつしやる事になつて、此方は中止致しましたのです、ホントウに惜しい事を致しました。

▲座敷の飾付　此應接間の造方は主人が隨分考へたので御座います、御客の時開ける次の室が日本風て、此處ばかり全然西洋風ても權衡が惡ふ御座いますから、種々工夫して斯樣なに御簾を拵へたの

て、先ア折衷に致した積りです、ハイあの石膏彫刻(種蒔老爺の立像)は美術學校の生徒の作ですが、チョット好い考で御座います、一體此邊は元麥畑で、立木一つ無い處でしたを、主人が此處等歩いたとき、大好きな富士の見えるのに惚れ込んで、直ぐ買入れたので御座います、それですから是丈の庭木を殘らず方々の植木屋から運ばせました、池袋の方からも取寄せました、山の下の方に池があります、御覽になるなら御案内致しましやう、餘り手入を致さない庭で、何處も草茫々で御座いますよ、(記者は大喜びて拜見を願ひましたが、夫人は椽先の階子を下りられ、小山の芝生を輕く疾く歩まれつゝ)一度西洋芝を植ゑましたが、何ぜか生きませんので、又日本芝に植ゑ變えました、イエ風雅でも御座いませんが、主人が却々庭に凝ります方で、チョット土佐風に拵ひた積りて御座います。

兩側の熊笹に沿ふて細道を上り、古雅な四阿の中の大きい腰掛を拜見致しましたが、これは樅の根株で、下總から御主人が持來られ、上部は火鉢に造られたとの御事、四阿の後には束ねた枯木の枝が、澤山積み重ねてあり、此處に暫く立つて眺めましたが、御領分の三町歩許りある青田の外道を緩々歩み行く馬士二三人は、宛然書中の物で御座いました、やがて前の赤土坂を下りて葦の茂つた池に濃緑色の小波を眺め、崖側の南瓜畑より、鞦韆テニスなど爲さる御子達の運動場を通て、遊嬉室を拜見致しました、此室内ズット本邸より離れて建てられた十五疊敷の平屋造て、硝子戸棚の中には剝製の鳥、摸型軍艦、組木、飯事道具まで置かれてあり、其鳴居に遊嬉」の二字を黑胡麻にて現はした木地の額(緑は麻の葉形に色紙を切組て列べあり)を掛けられてありましたが、これは

御主人の御細工で、御子達が手傳はれたとの御事です、尙御子達が麥藁や、江ノ島貝や、榧の葉で種々の圖案を凝らして、錦繪石版畫などの額縁を造られたのもありましたので、智育に行屆かれた夫人の御心懇に深く感じ入りました、やがて以前の令息と三令孃が引續きて此處へ來られ、玩具のオルガンを彈き、組木を並べなと睦し氣に遊んで居られました、記者は夫人に隨うて又元の應接室に戻りました時、御主人は椽側傳へに此室へ入り來られ、興味ある美術談を成されました、其一二を擧ぐれば趣味深き景は強ち實際上の絶勝でない事、(一)廣大な勝景を描けば却て纏まりの附き難い事、(二)遠景ばかり描いては物にならぬ事、(三)を始めとして毎朝立ち上る炊烟の色合、月夜に於ける遠近の樹影が此庭に最も妙趣ある事、(四)雪の溶けかゝつたとき小松が著しく黑く際立つのは調子が惡い事、(五)などて御坐いました、やがて長座を詫て御暇申上ぐる時、夫人は態々送り出でられ、車で御出で御坐いましたが、目白の停車場は直ぐですから、汽車で又御出で下さいと仰しやたので、舊百萬石の令孃なる夫人(夫人は舊加州藩主前田侯の令孃)のお優しさに感涙を催しました。

▲一家團欒の樂　人間には貴賤貧富種々ありますが、如何なる境遇に在りましても家族の和合は萬福の基と存じます、生活の上に何一つ不自由のない立派な家でも、其内部に立入ますと眞に溫かなる親愛の情を以て充されて居るのは、甚だ尠いと思ひます、主人は多年西洋に居りましたが、彼の善き家庭の模樣を聞きますと、一家親和の有樣言ふに言はれぬ妙味を多く認むると申しまして、今の日本社會に行はるゝ風俗習慣にては未だ清淨にして濃厚なる家内團欒

の妙味を正當に味ふて居るものは甚だ尠であると歎息して居ります
が、誠に幸の事には私方は母始め多人數でありますけれども、何れ
も健全で一家團欒の眞味を常に感じつゝ暮して居ります、又子供は
一人も缺けませず皆丈夫に成長致します事は、親の身として無限の
快樂であります、私は行屆きませんが母の責任として、此多くの子
供を成るべく過ち少く育て上げたいと思ひまして、幾多の心配と共
に樂しき希望を持て居ります。

加納子爵の家庭

大森八景園に隣れる鐵柵の御門は、舊一ノ宮藩主加納久宜氏の御邸
て、平民的生活を以て文明的教育を令息令嬢に施されあることは、

世人の普く歎美する所であります、記者の訪問致したのは八月十九
日の午前でしたが、御門を入ると右手に御供待がある、松、梅、櫻、
楓などの間に躑躅を列植せる阪路は、兩側に茶の木で圍うた芋畑、
菜畑、欵冬畑などが層一層區畫正しく作られてあり、「玄關及勝手に
は此道より」と書いた立札ある道を縫ひ登ること數十歩、寂寞を破る
蟬聲に迎へられて、綠陰の下を過ぎ、竹の枝折戸を開けて御玄關に
ベルを鳴らし、お女中に導かれて滑るやうな御廊下を二つ三つ越え、
二室續きの應接室へ通りました、此室は兩陛下の御眞影博恭親王殿
下の御寫眞を掲げられ、置物は加納家代々の重寶龍頭の兜、枝振り
見事な珊瑚、彫刻精巧の黑檀の書棚等、何れも整齊雅潔に裝置され
てあり、東南に面する御庭は廣々とした芝生で、圓形に刈込んだ若
松の間に車井戸の屋根僅かに見はれ、崖下の木立を越えて廣濶な眼

界は此御庭の特有とも申すべく、大森の村落、田園を隔てゝ鈴ヶ森の松林模糊たる空氣に包まれ、品川灣の白帆點々たる間を滊船の煙長く曳いて、峰なす雲に影を沒するなど、何時まで眺めても眺め飽かぬ光景と存じました、下り列車の轟々たる響稍遠ざかれるとき夫人が出て來られましたが、白紬の帷子に黑繻子と紫紺繻子との畫夜帶を締め、小さい丸髷に結ばれ中高で清秀な御容姿に、眞率平明な御應對振り、記者に多大の稗益を與へられました、記者は先づ御主人が鹿兒島縣知事御奉職時代の御生活から伺ひ始めました、

▲鹿兒島の生活　明治廿七年に圖らず仰せ付かりました時、主人は姑と私を喚んで任地へ參つて家族が長官顏をすることを悉く戒めました、やがて子供や下女を引き連れて引越しました處が、先知事さんの時代から使はれて居た家僕だとか、又書生だとか行きがゝり上置かねばならぬものが可なりありまして、一時は下ばかり十三人、それに家族が十一人、皆で廿四人の暮しでしたが、物價は唯今とは違ひます上に、鹿兒島は何でもお廉い處でしたから唯今の小人數よりも經費が少くつて濟みました、米が東京で一升二十五錢にも暴騰いたした時に十八錢の相場でした、炭は只今三十二錢位のより心持小さい俵が十錢、薪は棒の樣な堅木を一間四方積んだのを一ザイと申して、五圓で此割賃は五十錢と極つて居り、薪を買ふとチャンと薪割が參つて割るのですが、皆ぶら〳〵して、出して置く御茶を飲んだり、漬物を食べたりして暇を潰し、澤山割つて澤山賃錢を取らうとは致しません、畢竟生活が樂な故でありませう、沖繩の生活と申したら、本當に御話の樣に樂なので、石油を賣り歩くものは一鐺賣つて了ふと、空鐺を四錢で問屋へ買つて貰ふので、其四錢だけが

利益だそうですが四錢あれば三日も暮せるそうです、沖繩では常食が薩摩藷ですが鹿兒島でも多くお藷が御飯の代りですよ、それで燒芋屋がありませんでしたから私は誰か燒芋屋を初めたら、屹度賣れるだらうと存じ資本位は出してやるからと、出入の者に勸めたことがありました。

▲大島の女學生　夫人が赴任匆々管轄の島々を巡廻しましたところ、小學の高等科に出て居る女子は唯つた一人で、西いと子と申す者でしたが、他日鹿兒島の女子師範學校へ入學したい望の由で、主人も感心致し小學卒業の上は世話してやらうと、約束致して置たそうて、それが忘れた時分ヒョックリ宅へ出て參つたのですが、却々確乎した女で、特に男女の隔てなどは困るほど嚴重に守つて居り、チョット書生に之を渡して呉れと申しても、容を改めて斷ると云ふ風で、言葉も教師に教へられた通り、漢語ばかり使つて居りました、それに卷帶の島風で後で帶を締めることが出來ません、一體鹿兒島では皆前で結んで後へ廻すに、此女が段々と樣子も言葉も變つて、チョット見ては大島のものとは思はれないやうになりましたが、唯顏色は大島特有の青い土氣色でした。

▲歸京後規定の家憲　七年もなじみました鹿兒島を去るときは、名殘り惜くつて其上皆樣が留任運動をなすつて下すつて、別れる時は實に泣きの涙でした、此處へ歸りましてからは御承知の通り、華族と申しても小祿の家で多勢の子に讓るべき資產とても餘り多くは無いのですが、何卒借財だけは讓りたくないと云ふ考へて、一同心を揃へて節約を守る事に定めました、召使も下婢三人に家僕一人丈と致し子供達の學校通ひも三等汽車に乘せ、新橋停車場から學校ま

では徒歩と定め、衣服は夏冬共一切綿服筒袖と致したのです。

▲令息令嬢の通學　幼少で亡くなりました長男は、只今居ると今度(征露役)の御役に立つ位の年になるのです、長女は縁付まして最早や孫もありますので、宅に居るのは十八歳に十六歳の男兒と十五から十二までの年子の女子と都合六人で御座います、此邊から華族女學校まで御通はせの方は大抵二等で、其處の停車場へも御車新橋から學校までも御車で、其上女中が毎日御出迎ひと云ふやうになさるを、私共の子供は男の兒は勿論、末の娘まで人車には乗せぬ事とし、三等の滊車で通はせましたから最初は子供心に肩身が狹ひ心地も致したでせうが、近頃は何方樣でも皆三等になさいました、學生に汽車賃の割引がありまして、普通定規の乗車賃より又お廉くなつて居り、丁度半期で十圓づゝで御座います、學生の爲めには鐵道局で此通り便利を與へて居るのに二等で通はせるのは無益で御座います、それが止んだのは結構ですが、唯車の送り迎ひ丈は止みません、新橋から華族女學校まで四十分掛りますが、娘達はモット早う御座います、それで大抵な雨天にも歩きますけれどもひどい風雨の節には、新橋停車場の直側に主人が乗りつけの朝屋と申す車宿へ、學校から電話を掛けて呼ぶやうに致して居ります、悴共は風雨の時には、四谷から電車で途中乗換致して此方まで歸ることがあります、本當は定規のパッスを持つて居るものは電車に乗るのは損ですけれども、時によつて止むを得ません、私が時々東京へ參るにも三等ですが、主人丈は二等の定規切符を買つて居ります、これは年に三十一圓八十錢ですが、一體に定規切符は便利な物で一日に何度でも自由に乗れますから、子供などは御友達が御出てたと何時も東京まで送つた

りして居ります。

▲月謝と御辨當　華族女學校の月謝は一圓五十錢以上階級が御座いますが、私共では二圓宛出して居ります、御辨當は食パンばかりで六人分を二斤と定めて置きます、娘達は小さな切を三個程づゝ澤山なので、男の兒の方は餘程多い割合になつて居ります、それにジャミとかバタとか各好いた方を付けて遣はしますが、中にはジャミとバタと兩方少々ッゝ入れて貰ひますと申すものもあります、皆慣れて居りますから毎日それだけで澤山だそうですが、其代り歸つて參ると直ぐ御夕飯と云ふ規則になつて四時半に一同食事するので御座います。

▲食事　私共では主人を始め一切間食は致しません、子供も習慣になつて食べたがりは致しませんが、末の娘が餘り寂しさうな時はツイ私の方で可愛相だと存じて少しばかりのビスケットなど遣はしますと、其日の御夕飯が直ぐ減けます、チャント御腹が定つて居ると見えますネエ、十八の悴は一番嚴しう御坐いまして「母樣何か又夏樣に上げなさつたてせう可けません、左樣云ふことをなさるから爲めになりません」と申され「誠に面目ないがッイ少しばかりやりました」と私が詫びる樣な始末です、其代り能く御飯を食べますこと〳〵何の子供も驚くやうに食べます、並の御茶漬茶碗に山盛四ぜんは缺しません時によると「母樣今日は五ぜん食べました」などゝ自慢に致しますから「さうかへ澤山お上り」と申して笑ふので御坐いますが、宅の娘共を嫁に遣はす時は大食と云ふ事を第一に承知して貰はなければならないと心配致して居ります、オホ、、、畢竟運動が激しくつて身體が丈夫だからて御坐いませう。

▲米　家の人數は家族八人に家婢三人家僕一人都合十一人で、御米が平均壹ヶ月に三俵半麥が七升程です、朝と晝とは米の御飯で御夕飯に米一升につき麥三合の割にして炊きます、米屋は隨分方々から競つて參りますが、此處に住んでからの取付の店ばかりで一度も取り易へません、其代りに小言も充分に申してやります、先達も一升の小豆の中に凡そ一合程も屑があつたので小言を申したところ、雇人の不行屆にかこつけましたから、私が談じてやりました顧客先へ物を持出す時、主人や番頭が無責任で濟むまい、一體月々の支拂ひを奇麗にすれば何處の店から取るのも自由であるのに、殊に汝の店を愛顧にしてあるのだから其積りで勉強するが宜ひ、私の家では一々俵を開けて量ては見ないからと云つて、如何程升數を減らして置ても宜ひと云ふやうな怪しからぬ事があれば、以後斷ると斯う申し遺はしましたところ、さんざん詫び入つて注意する樣になりました矢張商人には時々小言が必要で御坐います。

▲牛肉魚類　忰が日曜丈肉食をしたひと申しますので、此日はザッとした洋食を拵へ、間は野菜を養たり、種々にして用ゐます、平生は品川から取りますか、客でも致す時は私が一番滊車で土橋の喜多川まで買ひに參り、西洋野菜も序に彼の近所の梅村で取つて參ります、誰ぞ病氣でも致した時は肉をチョット炙つて搾め、搾れた血汁を用ゐたり、致すので却々肉も要りますが、平素は平均七八回位てせう、宅では牛肉ばかりで豚は用ひません、御魚は東京に較べて餘りお安くはないと存じます、立入つた御話ですが五寸位の小鰺が一錢八厘位で之を二尾に何か野菜を添へたのを奥から下に一統に付けますが、忰達は血氣盛んの年頃で、却々二尾位では足りませんか

ら、先づ少くも總計三十尾位は入ります、尤も御魚は時によつて直段も〳〵々變りますが、先づ一日に六十錢位と定めて置きます、奥と召使と食物の違ふのは主人が大嫌ひて殘らず公平に致して居るので御坐います。

▲野菜　八百屋物は大抵畑の物て間に合ひますが客ても致す時に用ふ蓮根、慈姑、午蒡のやうな物とか、胡麻とか、ホンの僅かばかりを買ひます丈て、一個月二圓まてにはなりません、畑の世話は家僕が一切熱心に致し何ても善く出來まして、此頃は毎朝百個位の茄子が取れます、冬の漬菜は皆さんが加納の漬菜は別段だと仰しやる位て、井の中の蛙か知れませんが土地に適して居るのか、隨分旨しい御葉が出來ますので、毎年四樽ほど漬けます、菜は山東菜と申して唐菜のやうて、却々丈が高くなるのてすが、其お葉の根の處を細かく短冊に切つて、チョット鹽で壓し、辛子醤油て頂くとサッパリして旨しう御坐いますよ、一同が菜漬を珍重しますので、澤庵は三樽しか漬けません、畑物の種子は三田の育種場から買ひ肥料は肥料取次所から買ひますが、肥料は二俵(二圓位)ほど買ひますと剩つて人樣に上げる位て御坐います。

▲茶　畑の垣に少しばかり茶の木を植え毎年一同て御茶摘みを致し、番茶に製して置きます、併し主人は御茶嫌ひて、御客樣にも冬は珈琲、夏は麥湯ばかり出しますから、摘んだのは私が御茶好きて時々頂くばかり、大抵は遣ひ物に致して了ひます。

▲牛乳と卵　牛乳は病氣の時は例外ですけれども、平生は主人が二合、倅兩人が一合毎日四合づゝ取つて居ります、卵は宅の鶏が生むので、用料だけ御座います、ハイ唯今雄が一羽に雌が十二羽、そ

れに此程生れた名古屋コーチンの雛鶏が居ります、鶏の世話は私が受持て、毎朝早く塒を開けてやるのが樂みで御座います、餌は稗の外に肴の腸を煮て遣つたり致します、お暑い間は餘り卵を生みませんが、それでも毎日六個は拾つて參るので、春先の生む盛りには兩手に持ち切れませんから籠へ入れて持つて來る位で御座います。

▲味噌醬油　味噌は辛味噌を用ひますが、必要だけ買求めます、大抵五百目宛取りますが、一個月一貫五百目でせう、醬油は月に一樽で餘る位で、豆類など煮るには醬油を少しも用はないで鹽と砂糖で煮ます、鰹魚節は一圓位ですが、これは下婢に用はせるのに、極好ひのをあてがひませんと無益に澤山削ッて不經濟になりますから、イで一圓に三本位の薩摩節を買つて參ります。

▲砂糖　私共には酒鹽の外は酒類一切用ひません、其代りに砂糖の要ることは非常で御座います、特に苺時分には小供が學校から歸つて參ると裏の苺畑へ參つて苺を大きな味噌漉に一パイ取つて參り洗つて井へ入れ白砂糖を澤山かけて父を始め、下女にまで悉皆行渡る樣に致し、御友達でも御出でなさると矢張苺に砂糖を澤山かけて出しますから、砂糖は隨分澤山用ひます、苺のない時でも御菓子を拵へたり、御汁粉に入れたり、種々に用ひますから、毎月白砂糖一貫目足らず天光五百目玉砂糖五百目程用ひます。

▲麥酒を廢して寄附金に　主人は日本酒を少しも頂きませんで、御菓子が好きな方で御座いますが、食後に越の雪を一個食べる位で御座います、併し麥酒だけは胃の爲めに好いと云ふので、御夕飯に半壜を私と二人で飲んで居りました所が、主人が先頃腸の工合を損じてから麥酒も全然止めました、主人が飲まぬのに私が好きもせぬ

物を頂くのも無益と存じ一個月四圓程かゝる麥酒代を毎月奬兵會へ寄附することに定めました。

▲炭薪　炭は唯今六俵位用ひます、冬分はストーブに土竈炭を用ゐ客間の埋け炭は櫻炭を用ひますが、組合の會議などがあつて夜を更す時は一晩に櫻炭一俵(三十錢)位費つて了ひます、組合と申すのは小さな銀行の樣なもので、村の人々組合つて貯金致し、それを資本家へ貸して利分を取るのですが、私共で其周旋をして居るのです薪で御座いますが、これは湯殿の分も入れて四圓位で御座います。

▲現金買　通にして置くのは米、牛肉、牛乳位であとは殘らず現金拂で御座います、通帳と申すものは、間違の因て、覺えのない品が附けてあつたとか何とかて面倒て可けません。

▲電氣と石油　電氣鐵道が此地へ引けますと、一番先きに申し込み、電氣燈を引きましたので、十燭光の半夜燈を八個所程附けて居ります、此器械を借ると、十六錢宛掛るのですが、私共では永遠轉宅致さぬ積りですから、最初に買つて仕まつたのです、ハイ便利燈と申すと二室兼用に用ふので、此室で使ふ時は彼の室は消えるのです、宅では此坐敷と主人の書齋が便利燈、又臺所と玄關が便利燈になつて居るのですが、臺所の御夕飯は五時て大概日の暮れぬ内に後仕舞が出來て了ひます、併し朝が早いので冬分はランプを點けなければなりません、此石油が一罐弱も要りませう、宅では安全のために久美油を用つて居りまして、一箱(二罐入り)五圓廿五錢石油より一箱で二圓位高う御坐いませうか、電氣燈をつけてからはランプが危なくつて耐らなく思はれます。

▲新聞　新聞は時事新報ばかり購つて居りましたが、私が考へ付

いて毎日讀んだあとを此大森から出征した人達(四十八人)へ送ることにしましたが、一種の新聞では一個月の内に四十八人に行き屆きませんから、此頃其爲めに萬朝報も購つて居ります、子供には新聞を見せません、三面など解せぬ事があると質問されて返答に困る事柄がありますから、雜誌は子供に必要なのを購つて見せます。

▲植木屋　庭はチヨイト先ア主人の道樂とても申すのでせう、これだけの處ですから毎日植木屋が缺かさず參つて居ります、芝の手入の時には六七人も參ります、皆日當ですが、毎月平均二十四位拂つて居りませう、イエ開け放して別段何の風情もありませんが、唯月の出と、日の出は此庭の自慢で毎朝日の出の時は、何か用を仕掛けて居ても此處へ來て見るのが、實に何より樂みで御坐います。

▲御行啓の榮譽　昨年十一月十三日に皇后陛下が八景園へ御行啓のあらせられましたが、此御沙汰は其前日に承はりましたので、大森細工を献上致したいと存じましたけれども、何分急の場合で職人が間に合ひませんので、枝柿を五十把ほど取り寄せ、廣蓋へ載せて天覽に供へ奉つたところ大層御叡慮に適ひ兒島さん(惟謙氏)御夫婦と私共夫婦に拜謁仰せ付けられ、其後(午前十一時頃)で香川樣が久宜に貴氏の御邸へ御立寄の御思召を漏らされましたから、左樣心得て居なさいと仰しやつたので、私共夫婦は驚喜恐懼致し、私は直に宅へ飛んで歸り、下婢共に掃除を申し付け又下婢共が、障子の孔からでも拜む樣な事があつては、恐れ多いから、座敷の障子は悉皆開け拂ひ、奥の方は締切に致し、庭の落葉など掃かせて居るうちに、最早御行啓遊ばし、此向ふの處へ御椅子を置かれ、望遠鏡で海を御覽遊ばしては、久宣に御尋ねなど遊ばし、丁度四十分ほど御小休みにな

りました、其間に千家樣が子供達の拜謁を願つたら宜しかろうと、仰しやつて下さいましたので、恐れ多いとは存じながら、早速願ひましたが、其時までは門前で天顏を拜む積りて、木綿筒袖に袴を附けて居りましたから、衣服を着換へる暇もなく、其儘陛下の御前へ出ましたが、直ぐ御側まで御召しに成り、年は幾つ學校は何處と御尋ねあらせられ、筒袖て可愛らしいと御言葉を賜はり、尙ほ八景園へ御行啓の上に、子供等を召され、御菓子を賜はつたので、私共は嬉しさの餘り、全然夢のやうに存じました、御行啓の折は、大抵椅子を宮內省から運ばれますが、私共では特に、宅の椅子に御掛けを辱うしたので、其椅子は直ぐ箱へ入れ、樟腦詰に致して大切に庫へ收め、其御場所を人に踏ましては勿體ないので、石で圍ひ、大理石で碑を立て、文字は久宣の兄(立花種恭子)が認め、永く此榮譽を子孫に殘す事に致しました、彼處に見ゆる大理石がそれて御坐います。

▲衣服　衣服は綿服と定めて主人始め實行すると申しますが、年を取つて木綿づくめて徹さずともと存じ主人だけには勸めて少しは柔かい物を着せます、併し前にも申し上た通り、子供は綿服て筒袖と定め、學校は勿論何庭へ出ますにも改良服て徹して居ります、學費と申すものは實に御廉いものてすが、衣服に綺羅を張り出したら何の位かゝるか數が知れません、八丈を御常着とし二尺五寸もある御袖の御衣服て御出てのある中へ、宅の子供が綿服て參つて、若し耻ぢて厭になれば華族女學校に負けたので參り徹せば勝つたのだと私は申して居ります、たが今日まて何とも申さずに平氣て通つて居ります、華族女學校て早く服制を一定すれば宜いと存じますね、下には綸子を召さうと紗綾を召さうと、御身分次第てすが、上張りだ

けは實踐女學校のやうに一定なすつたら如何でしやう、左樣すれば競爭の弊も止み、又一つには誰れても一見して華族女學生と判るので、生徒も自然行儀を慎むから、極く宜いと存じます、子供の改良服は山根正次さんの考案に、私が少し工夫を加へた物を拵へますが、布地もタント入らず、運動上にも便利で御坐います、此頃四人の娘の單衣用に求めたのは舶來更紗で、二十一ヤール(三反程)七圓十四錢でしたがこれだけで袴も入ません、唯だ裁ち合せの都合があります から、四人共何時も揃ひて、各自に柄を選ばせると云ふことは致させません、冬は下に綿入れの袖なしを着せ、上へはフランネルに金巾の裏をつけた改良服を着せます、主人は帶と長袖が大嫌ひて、先達ても夏冬一二枚の袖の着物に一二筋の帶を土用干致して居る處へ主人が歸つて參り、今に夕立が來れば宜いと申しますから、私もお暑いからと存じて返事して居ました處、イヤ夕立が此坐敷へかゝつて帶も着物も流して了ふと宜いな、毎年虫干をする世話が無くつて清々すると申して大笑致したのです。

▲靴　履物は靴ばかりて殆んど下駄を穿くのが不慣れの位です、私共の子供は車に乘りません上に、運動が激しいので靴の損みは如何しても早う御坐います、それで靴は能く足に合つた上等のを高橋か大塚へ誂へて製らせますが、一足四圓のを年に二足程も穿きませう。

▲下婢　朝は五時にベルを鳴して一同起き出て、夜は九時にベルを鳴して臥ります、朝は私が此應接間と彼方の住居の掃除を致し、それから裏庭へ出て鷄の世話を致します、夜分は九時に主人や子供が息みまして、私は火の元や戸締りを見廻り、十時に息むので御坐

います、三人の下女の受持は略定めてありますが、忙しい時は互に助け合ふ樣に致させます、十年餘も勤めた乳母なぞは百圓も貯金致した上に、衣類も可なり拵らへて、先達緣付きました、又高等女學校を卒業して家政の實習をしたい爲めに參つて居る者も御坐います。

▲醫者　私共では運動が激しいので、幸に病人は出來ませぬが、掛りつけの醫者は日本橋の笹倉英三郎で、用があれば電話で呼びます、電話は停車場の自働電話へ參るので、實は電話も設けたいと存じたのですが、品川から引きますだけで五六百圓もかゝりますから、澤山の用のないのに贅澤だと存じて止めました。

聽て御主人は御庭傳ひに歸り來られ、興味多き教育談、家政談を聽かせられましたが、夫人は晝食後後園に案内せられ、先鐵網で張つた鷄の小屋御子達御培養の花壇、苺畑、葡萄の絡んだ垣、水密桃、茉萸、栗などを見せられ、それて毎日御夕飯の際に食る果物は、皆な御庭の物と話されました、それから私は行啓紀念の石碑を拜し、紅葉の頃に是非お出で下さいとの御深切な御言葉を、嬉しく承つて退つたので御坐います。

田中子爵の家庭

夫人伊與子は、土佐國佐川の領主深尾鼎氏の三女にして、嘉永四年を以て生れ、明治九年を以て今の宮內大臣子爵田中光顯氏に嫁す、人と爲り濃厚多信慈惠を好む、淡薄少信の徒と趣向を異にする所以なり、夫人は各種の女性事業に盡力さるれども街衢を厭ひて表さゞるが如きは其性格の一斑を窺ふべし。

夏尙寒き關口の瀧のほとり、駒留橋を渡つた處が、有名なる芭蕉庵

即ち田中宮相の私邸であります。御主人は日曜毎に公務の勞を休める爲に、夫人諸共此邸へ歸らるゝのですが、樹蒼とした竹籬を後にした蘆家に瀟洒な門あり、芭蕉翁手植の松は、左右の枝を張つて、前面は神田上水に翠影を映して居るのです。記者は豫て夫人に御庭拜見を願つて置きましたが、丁度十一月の下旬、紅葉霜を帶びたる朝、庵の御玄關へ伺ひました、奥深い網代の廂と鼠壁の欄間に這ひ延びた蔦蘿の中に小さな釣鐘を懸けて、其傍に撞木を挿んでありましたが、呼鈴に代ふるに目白に緣ある鐘を以てせられたのは、先づ訪問者を美化せしめらるゝ御趣向ならんかと面白く拜見する内、御女中出て來りて案内ありしゆゑ、記者は蔦に埋もれた靴脱石へ履物を脱ぎ、次の八疊の座敷へ通つたのですが、白緣の疊に一間の平床あり、掛幅は雪舟筆の人物で其下にはつるのある京燒花瓶に白薔薇外一種の花を挿され、東側は小壁に青貝柄の槍一筋を、南側は芭蕉略傳の古い額一面を掛けられてあるのみで、目立つた裝飾の無い清淡な御座敷、あたりは自から寂として小春日和を悅ぶ山禽の聲、琴瑟を彈ずる如き筧水の響に塵俗の境涯を忘れて、恍惚として居る處へ、白茶無地の襖を靜かに開けて出て來られし夫人は、小豆色萬筋の京御召に、黑縮緬の三つ紋羽織、茶色の無地縮緬の襦袢の襟を正しく合せ、無地御納戸の縮緬服紗帶を僅かに現はされ、髮のふくらんだ落付いた束髮は、色白な紅面に好く似合はれて、總體に纖柔な御風姿、如何しても御年より七八つ御若く見受られました。先づ叮嚀に御挨拶ありて——、

今朝は特に霜も深う御坐いますのに、遠方ようこそ御出、斯樣な田舍家て何の興もなけれど、昔の俤其儘の庭の景色を御緩りと御覽遊

ばせ。併し御承知の通りの昔者ですから、御話だけは御免しを……と再三再四辭退されましたが、記者の切なる請を憫然と思召され唯だ平素の御話だけ爲されました。

▲服裝　着物は唯今の處、何でも二通りづゝ要ります。洋服は如何致しても廢されませんが、彼れも流行、衰頽か御坐いまして、袖が濶くなりましたり又キューッと斯樣なに(袖口を締付けて見せられ)なりましたり。此節は袖の先だけ濶いのが流行ますネ。私共はサッパリ搆はぬ方ですが。餘り衰廢つた服裝て外國人の前へ出ましては、日本の外聞が惡いと思ひまして……本當に繁縟な事て御坐いますネ。それから日本流の儀式交際には裾模樣も紋付も要る、夏冬の禮服も要ると云ふ風て、却々費用のかゝる事てす。今は移り變りの時代てすから、歩き方其他の禮儀も皆二通りて、嫌けられる小さい孃は本當に御可哀相なくらゐですよ。

昔の御武家の帶は、五月頃から丸ぐけの兩端を長く突出して締めましたから、三尺口は躰を横に致して歩いたのてす。彼の錦繪の千代田城大奥といふ中には、實地に近いのがあります、全く本當の風俗を寫したものて御坐いますネ。私なぞ昔者ですから、何となう舊幕の風が慕はしくてなりません。

▲髪　私は丸髷好きて御坐いますけれども、三日と結んて居られません、御交際向には是非束髪に致さなければなりませんから……。以前張差を入れたので、中央が禿げて居りますゆゑ、獨りて斯う云ふ風に結ふのてす彼の椎茸髷て御坐いますか。彼れは上方の風と武家の風とは異つて居りました、上方のは葵の葉のやうに結つてたけ、ながて留め簪を挿します、武家のは二の環を入れて笄を挿します。

先ア錦繪にあるやうな風なので御坐います。

▲小説　唯今は小説なぞ讀む暇は御坐いませんが、以前は能く馬琴のを見ました。如何しても忠孝の道が勵ましてある小説は讀んでも、力が入りますネ。此節の物は何ですか結末が煙の樣で詰りません。

▲音樂　琴は生田の方て御坐いまして、五歳から稽古させられましたが、本當の御嬢樣藝て何も出來ません。召使に山田の出來る者が居りまして、少しばかり慰みに稽古した事が御坐います。ヘエー彼の貝盡しも改良になりましたか、アア成程チョット下品な所がありましたネ生田はズット上品で三味線に合しても、尺八に合しても宜う御坐いますこと……新月だの梶枕などは誠に品の宜い物て……。一躰生田の曲は詠歌から取つた物です、尺八は古童が一番名人て、

先達ても或園遊會て合せ物に出席しました。生田の爪は平ですから音が強く聞えます、尤も私の母の時分は細長い爪を用ゐたさうです、坐り方も斜に琴に向ひますから極上品なのです。

▲和歌　和歌も大好て幼少から習ひましたが、何分田舍風て唯今はお恥かしうて迚も……。興風會て御坐いますか、誘はれて能く出ますが。年を取りましては進まぬもので御坐いますネ。

▲慈悲　畜類は何ても好て、中にも汚いのを餘計に飼ひます、ホ、、、妙なので御坐います、ですから其處らへ棄てた犬や猫を皆拾つて遣つて澤山飼つて居ります、人に嫌はれて憫然だと思ひまして……。一躰以前は癇性とか申す質て、汚い事を致すのが何より嫌ひでしたが、辛抱は嫌ひの事を致すのに限ると存じて、汚い事を何ても致しましたから、此頃は何ても無くなりました。畢竟忍耐で好嫌

ひが無くなつたのです。

と夫人は忍耐を以て慈悲の名を掩はれました。

私の好きな事を申したら澤山御坐いますが、天保時代の人間の下らない御話ですから、何卒御書き下さいますな、本當にモーちよいと劇場へ出掛けましても、宮寺へ參詣致しましても、直に書立てられて厭て御坐いますこと……。奏任一等位の時が一番氣樂で御坐いました。種々惡口を申されるのも、御維新前ぼんやり育てられた罰で。天命だと思つて諦めて居ります……主人も私も名聞は好みませんので、つく〳〵忠孝の道ばかり慕はしう存じて居ります、迚も死ぬなら大君の御爲にと、此樣な事ばかり思ひ暮して居ります。

此時毛並の奇麗な三毛猫が、襖の陰から徐に來て夫人の御膝へ上りました。

此猫も捨てられて居るのを拾つて遣りましたので、此頃漸く肥りました。

▲御庭散歩　夫人は猫の背を撫てながら東の障子を開かれ、詰らぬ御話ばかり致しまして御退屈でしたらう、大分暖かに成りましたから、少し庭を御歩き遊ばせ、私が御案内致しましやう。

夫人は斯く言はれて手を鳴らされ女中に命じて庭下駄二足と蝙蝠傘二本とを取り寄せられ、先に立つて飛石を越え、熊笹の繁つた土橋を渡り、芭蕉堂の方へと案内されました。此祠は樹木生ひ茂つた高丘の頂に鎮坐され、赤土坂の細道勾配急にして滑り易けれど、夫人は最容易げに、御歩い成され、度々躓きさうになる記者を助けられつゝ、樣々の質問に御答へ下さいました半腹の小暗き處に高麗燒の白衣觀世音あり、朝鮮での分捕品を御主人が去る方より求められた

との事です。少し隔つて苔蒸した羅漢石像二軀列べるは、太古の掘出物であると話されましたそれより二三の植物に就て伺ひましたが、夫人は一々説明せらるゝやう、これは錦糸梅と申して、眞黄色な花が咲きます。此方は雪柳で、花は眞白て御座いますこれが紅葉したのもチョット活けられますよ。此方のですか、これは座敷に活けてあつた初元結で、嫁菜の種類ですが、誠に可愛らしい花ですこと。其處の樹は、檜の種類で羅漢松です、彼の軒の蔦ですか、あれは姫額です。ハイ主人が植物道樂で種々な物を植ゑましたが、大概は元の儘です、躑躅の垣根も、住居の座敷なども少しも變えません。

尚だら〳〵と木下道を登つて、高い公孫樹を廻り古色蒼然たる芭蕉堂に導かれ、記者が手帳を開いて寫生を始めました時、老婢は火鉢を持つて登つて參りました、夫人は堂の柱に倚られ。

私は慣れて居りますが、高い處で嘸御寒いでせう。御承知の通り此堂は始終芭蕉翁が居つた處で、其後代代の宗匠が此に住つたのだ相です。彼の塚は『五月雨に隠れぬものよ瀬田の橋』とか云ふ翁の短冊を埋めたと申す事で、此松も其樣な緣起で五月雨松と申すのでせう。詳しい事は江戸名所圖繪の十二卷に出て居りますネ。ハイ明治十九年に前庵主から讓り受けましたので……。

面白き御話未だ半ばにもならない折、眞下に見ゆる關口上水で、鷺車に乘つた乞食が何か釣り上げたのを認められて夫人は、忙しく坂を降りて行かれました堂内の寫生終つて塚をも一見し、早稲田田甫の彼方大隈邸より折々響く鼓の聲を聽きつゝ、南手の坂を降る時、夫人は向手の土橋の上に佇んで、召使をして池へ鯉を放たしめられ。いと樂しげに眺めて居られまじた此時肥料の笊を持つて記者の側に

立つて居た老爺は記者に話すやう、彼の鯉は最前ヨイ長と綽名さるゝヨイヨイの乞食が上水で釣つた鯉です、奥方がそれを買ひ上げて御遣りなされたのです。日曜には屹度彼處へ來て釣りますのを、何時も奥方が憫んで買ひ上げられ、其鯉は御池へ御放しなさいます。彼樣な事が何よりの御樂みなので……。

始めて先刻の御容子が判りました。復び元の室へ戻り、名所圖繪を拜借して御暇致しましたが、目白臺へ廻る爲に御門脇の胸突坂を上る時、空車ながらに車夫の艱めるを見兼て、書生さんが後から抑上げたのも、平生の仰付行屆ける故であると感じました。

平田男爵の家庭

平田夫人たつ子は、山口縣士族勝津兼亮氏の四女にして、文久二年五月を以て生れ、九歳の時品川彌二郎氏の養妹となり、十八歳にして今の從三位勳二等男爵、前農商務大臣貴族院議員平田東助氏に嫁す、人と爲り眞率にして客を愛し、儉素自ら率ず品川氏の養妹平田男の配偶たるに恥ぢずと云ふべし。

寒威殊に強く水道栓氷結して正午を過ぐるにあらざれば水の出でざるもの四五日、一月二十九日朝から少しく緩んだので、午後二時頃駿河臺袋町の御邸へ伺ひ、黒羅紗の上履幾足を並べられた御玄關から滑べりを敷いた長廊下を通つて右手の應接室へ入りましたが、第一に客の眼を引くのは左壁に高く掲げられた油繪三面で、中央は人物兩側は漁村の風景で何れも伊太利風の配色濃厚な古畫と見受けら

れ、其他蘆雪筆、淡彩の支那人物屏風、銅製唐獅子の置物手編みレースを敷いた紫檀のテーブル、白布で覆ふた椅子など何れも端正に整理せられてあり、豪奢でなくして雅潔質實にして和氣に充され、窓硝子から見ゆる植木棚の蘭幾鉢は風情面白く列んでありました、記者が此室へ入ると間もなく出て來られし夫人は、丈高く肉豐かに色の白い愛嬌の滿ちた御顏色には、未だ小皺の一つだに見えねど御子達の多い故か、小さな老けた丸髷に金無地の目立たぬ櫛簪鼠縞秩父銘仙の綿入に焦茶の紬飛白の羽織黒繻子の帶へ前垂を挾んで居られましたのは、吐哺握髮して客を待つたと云ふ故事を聯想した位でした、初對面の御挨拶も殆ど舊識の如く先づストーブの加減を試みられて後に御坐に着かれ。

▲腦が持病　折角御親切に仰しやつて下さいますが、私は皆さんのやうに學校へも參りませんし、それに元から腦が持病で、人中へ出ますとのぼせてグラ〳〵する癖が御坐いますので、何方の會へも伺ひませんから、何も面白いお話をする術を心得ません、ハイ御覽の通りの躰格で極壯健らしく見えますが、見かけ倒しで始終御醫者樣の御厄介にばかりなります、濱田さん賀古さんなどにも願ひました、仕合せに善い御醫者が近所で御醫者樣に緣のあるのも碌なことじや御坐いません、近頃は餘程宜しい方ですが記憶が惡くつて困ります。

▲何時も此通り　東助が御承知の通り極構ひません方で、誰樣が入しやつても、御恥か敷い樣な服裝で御目に懸り、全然書生風ですから、坐敷なども少しも構ひませんし、誠に見苦しいので御坐います、私も亦御覽の通りの不作法者で、何時何處で御目に掛つても此

通りなので御坐います。

▲佛敎　氣の鬱く時は說敎を聽くのが益があると存じて、折々出掛ます、ハイ眞宗の西の方で主に小石川の稱名院へ參り、又築地へも參ります、島地默雷さんの御話も能く聽問致しました、何卒島地さんを迎へて宅の婢共にも聽かせたいと存じますが、先頃までは富士見町の官舍の方と、逗子の方と三軒に分れて置きましたので、一人に聽かせて一人に聽かせぬ譯にも行かず、皆な集める機會が六ケ敷いのでッイ〳〵延引し居りました。

▲品川家の姉　私は不思議な緣で、九歲の時から品川の家へ養女の約束になり、十五歲の時、丁度明治九年に品川一家と共に東京へ出ましたので御坐います、品川の姉（彌二郎夫人）は十四の時嫁に參つて、却々苦勞した人で、氣性の確乎した上に、佛敎にも熱心でありました、萩の松本と申す處は、井戸の水が惡いので、毎日川水を荷桶で汲んだそうですが、其頃兄は留守勝ではあり、生活向も豐かで無つたので、姉は木綿を織つて川水に晒して賣りましたり、又は山へ薪を取りに參つたり、隨分エライ骨折を勤めたそうです、私などは別段難儀も致しませず、此家へ嫁る時にも、御飯の炊き方一つも存じませんで、結構な身分になりましたのは勿躰ないことで、私の樣な仕合なものは無いと始終難有いと存じて居ります。

▲運動　身躰の爲めと存じて急がぬ時は成るべく步行きます、逗子へ參る時も汽車までの往復に大抵步く樣に致します、如何致しても逗子の方は坐敷も狹いので、掃除に手が入りませず、又御客もなし、暇が多いものですから、近邊をブラ〳〵遊び步いて身躰の工合が宜しう御坐います、畏れ多い事ですが、皇后陛下は先頃葉山で御

靜養中、大層御機嫌麗はしく、時々御運動に御歩ひ遊ばしたのを拜みました、……ハイ彼の邊の民は却て能く尊顏を拜みますので、勿躰ない樣に御坐います、ツイ先達ても、女官六人ばかりを御伴に御連れ遊ばして、富士見橋を御渡りになり、濱邊で貝拾ひを遊ばして入らせられました。

▲料理　郷里では大概料理店から取寄せず、家へ料理人を呼んで致しましたし、私の母がキカヌ氣の人で、何でも致すのを見て居りましたから、先ア詰らぬ事位は出來ますが、田舍料理で、それに東助は米澤、私は萩で食物の趣味が違ひまして困ります、萩と東京との違ひで御坐いますか、大抵同じてすが、國の方のは何でも鹽辛いので御坐います、御魚は新らしいので、私が廿年振りて一寸歸郷致した時、何の魚の肉も堅過ぎる樣に思ひました、鮪はトントありませんから、魚軒は主に鯛かオホセを用ひます、オホセは先づ鱶の樣な魚で、圓く切ると骨の周圍が薄赤く花のようになつて居ります、盛んな式の時は口取など島臺に盛りますが、ザッとした時には三寶に載せて式紙と申します、唯今私共の家では和洋折衷の料理て定りはありません、左して分に過ぎた奢りは致しませんが、家内中一日の生命とも致して樂みを盡しますのは晩餐の時て御坐います。

▲遊藝　私の七八歳位の時郷國では中々遊藝の躾は嚴しかつたので、唯今何の役にも立ちません、ハイ琴唄の三味線て、大阪唄から多く取つたものて御坐います、其頃の寒稽古は朝三時頃に起き、水に手を浸してから椽先て浚ひ、又夜分は母親が附いて大きな聲て唄つて歩くのです、川の岸を一周して歸ると、丁度二十丁程ですが、毎晩缺さずに吹歩いたのです、ホントウに馬鹿げた事でして、此位

熱心に教へ方を有益な事に用ひて呉れたなら、唯今不自由は致すまいものと愚痴が出ます、子供達にも能く申す事て御坐います、私は遊藝は餘り好みませんし男の子達が皆頑固の方ですからトンと致すことも御坐いません。

▲哺乳　七人の子供を三人取られましたが、如何いふ理由か乳母にかけた子供ばかり取られました、只今廿四歳になる長男は私の乳で育て、他の三人はコンデンスミルクで育てましたが、其三人は極壯健て、長男は却て一番身躰も細く、腦や耳の工合が惡いのです、人乳と牛乳との優劣に就ては、樣々の說がありますが、人の乳も一概に善いとばかりも參りますまい、尤も私の乳は白水の樣な薄い惡い乳でありましたから、別段ですが、ミルクも中々馬鹿に出來ません、ハイ御飯は少し足がつきましてから遣はせました。

▲長男　長男は體が弱いので、中學卒業後當人の好みて美術學校に參つて居ります、文學の方もモー少しやらなければならぬと申して居りますが、稽古畫ですか大概學校へ置て御坐いますので、ナアに未だ碌なものは出來ません、ハイ東助も畫は大好て先達中逗子の宅の襖を玉章さんの御弟子に畫いて貰ひました、此人は乏しい資金を以て勉强し田舍廻りをして、隨分難儀をされたそうて、近頃大層腕が利いて望のある御方です。

▲次男　次男は躰格も性質も兄とは反對て、ゴツ〳〵して居りますので、寒中足袋も穿きません、當年二十歳になりますが、當人は海軍の方をたつての望みて、卒業一年前に師範中學を止めて、海軍の試驗を受け、昨年十二月四日に呉港の先きの江田島へ參りました、御友達も知己も一人も參りませんが、校長や教員方が御深切なので、

何より安神して居ります、それに小遣なども皆學校で監督して日曜に二十錢宛渡す丈で、少しも無駄な入費がかゝりません、ハイ郵便は一週に一度缺さず寄越します、時候は餘程暖かいと見えて、十二月彼地へ參つた時分月見草の樣な黄色い花が盛りであつたそうです。

▲三男　これは十七歳で、矢張師範の方へ通ひますが、次男と同じやうな氣風で頑固の質で御坐います、直此向ひの方に謠の師匠がありまして、朝早くから聲が致しますのを、頻りに氣に致して此時節柄餘り悠長な事だと思ひましたが、寒稽古だと聞いてそれでは仕方が無いなどゝ申して居りましたが、矢張御茶の水の學校へ通はせます、彼處は誠に良い學校で、衣服も式日に銘仙止り位ですから、娘も縮緬を着るのは自分から厭がります、此頃は地方でも大抵黒木綿の紋付になつた樣で、結構なことで御坐いますネ。

▲會と雜誌　愛國婦人、敎育會、衞生會、保育會、其他二三に入つて居りますが、前にも申し上げる通り腦が惡い爲めに、人樣の御集會に出ます事が出來ません、會の雜誌は大抵拜見致して居ります、他に「をんな」女鑑など少しばかり見ますので……。

▲和歌　私も長男も下手の横好ですが、サッパリ出來ませんので、折々止め樣かと申しますと、何樣な腰折でも自分丈の樂みとして挫けずに勉强するが宜いと、毎度叱られます、ハイ先生は松浦さんに願つて居ります。

▲性急　一躰御茶や、花などは私のやうな性急のものには氣を沈着かしめて極宜いので御坐いますが、家事が相應に忙しいので、何樣も致す暇が御坐いません、下女も五人程居りまして、其中廿五になりますのは九年も勤めて當節は萬般取計ひが出來ますし、針仕事

も順々に仕込みまして、各自少しづゝは致しますから、私はホンの福袢の襟をかける位で濟みますものゝ、子供も多し來客も多いので、私が先へ立つて致さなければ、手が廻りません、それに掃除が嚴しい方ですから、使はれるものの達も骨が折れましやう、ハイ大抵逗子の宅へ彼の土地の漁師や百姓の娘を雇ひ入れ、其者が慣れますと東京へ呼ぶといふ樣に致します。

▲召使の貯金　召使達に貯金を致させるのが必要だと存じて、種種工夫致しました、最初の内は年末に其貯金を召使連名で養育院などへ寄附させて見ましたが、何樣も下女の連名で寄附する例も他に見ませんし、又大勢の金を一人だけの名前で寄附と申すも不都合ですから、それは止めに致し、五十錢程宛掛けさして、十個月目位の無盡を設けて居りました、其内丁度昨年の二月頃でしたが、汽車の中で圖らず金森通倫樣に出會ひ、それから種々貯蓄に就ての御話を伺ひ、熟々感心致したものですから、宅へ御迎ひ申して、召使一同にも御話を願ひましたが、女共も皆感心して伺つたので御坐います、それで五月から前例を殘らず改めて、各自一同一錢宛の貯金をさせ、銀行に預ける事にしました、尤も元金として一圓又最初の一ヶ月分として三十錢、都合一圓三十錢宛を私が皆に出してやりまして積ませ始めましたが、皆も漸々溜るのが張合で喜んで居ります。

▲紙屑空壜　紙屑や空壜の實代は一個年貯金箱へ溜めて年末に頭割に致し、又はそれで反物なぞの福引をさせます、平常入れる箱を定めて置て、廊下に散つて居る紙屑や、臺所の空壜を誰でも見付次第に持つて來て入れさせて置くので御坐いますが、塵も積れば山で、中々馬鹿にならぬものですネ、ハイ銀行の通帳も、貯金箱も、チャ

ント私の手元に預つて置きます。

▲子女方の貯金　子供達の小遣も定めて渡します、男の子は一圓末の娘には五十錢宛ですが、筆、墨、鉛筆など細々した物の入用だけですから、各自此中を餘して、其金は又子供の貯金箱へ入れます、又私の方で調へて遣る大きい買物でも、自分達が欲しいと思ふ物を我慢した時には、それだけの價を箱に入れ、其他今日は車に乗る處を耐へて歩いたとか申す場合には、矢張貯金へ廻します。但し小遣の少々掛りますのは長男で、先生方の送別會だとか、繪具だとか、筆だとか要りますから却々他の子供の樣には參りません。

▲掛取の金言　金森さんが或時按摩を御呼びになつたとき、其收入を聞かれますと、上客は一療治十五錢だと答へましたので、種々彼に貯金の方法を御示しなすつた處、按摩も感服して其時から收入の半分を積むことゝして、十五錢の收入に七錢づゝ貯金したそうです、所が先生が之を聞かれて「半分宛貯金する定めならば七錢では五厘足らぬでは無いか」と申されたが、按摩は「先生五厘位何うでも宜いじや御座いませんかと答へ」先生は更に「五厘と云へば僅かな樣だが、長い月日の勘定が溜ると大きいから粗末にならぬと諭されたそうです、私宅へ昨年出入商人の小僧が掛取に參つた時、家來が帳面を高から三厘と云ふ端錢は面倒だから負けろと申した處、小僧は中々承知せず「三厘は僅かですが、度々負ける樣な事になると、大きい高になりますから負けぬ事に極めてありますと答へましたそうで、丁度金森さんの按摩を諭された話と一對ですから面白く感じたので御坐います。

▲金森氏の家族　金森さんの北海道の御留守宅では、御子樣が夜

業に新聞紙で菓子袋を張り、それを義捐金の用意として貯蓄されるそうです。又御女中達も却々節儉て、鼻紙位の入費の外は大抵貯蓄されるとの事です、先生が善く御話ですが「西洋では收入の中から貯金を先づ第一に取除けて之を神に献げる御初穂とする習慣で、斯くあつてこそ眞正の尊い貯金と謂つて可いが、日本では大概經費の餘りを貯金に廻すから、丁度乞食に遣るやうな方法ですつてオホ、、其他理髪店に拂ふ度々の錢は大きいから、高くつても剃刀を買つて自身で剃るが可いなどの御持論なので、髪かせぎ、足かせぎ、煙草かせぎなど、種々の名があるのです、眞實に忽にならぬのが些細の事だと存じますよ、種々の慈善向の會費なども、平生少し宛取除けて置けば容易く出金が出來ると思ひますよ。

▲下女へ足袋代　私宅では客の出入が多く自然夜分も遲くなり勝ですから、女共へ足袋代として僅かづゝの心付を遣はせますが、これも矢張貯金の方へ加へて置きます。

▲買物　定つた出入商もありますが、大概は自分で買物に出掛けます、自分でなければ思ふ樣に參りません、イエ最早獨りで風呂敷を下げて行きます、電車へも乘りますし、チョットも構ひませんが、それでも世間で大臣の妻が何う斯うと噂して新聞にでも出ると主人の外聞にも關ると存じ氣兼して小さくなつて歩くので御坐います。

▲小間物屋は入れぬ　頭の物など一つ物を何時迄も用ひて、一向流行などに構はぬ主義ですし、小間物屋など出入しますと若い女共は見度もあり、隨つて下らぬ品まで買ふ樣になりますと、金を費ひ、時を潰させまして、それが何の益にもなりませんから、一切入れぬ事に定めて置き、必要の折は外へ買ひに出る事と致して置きます。

精細な御話愈々佳境に入り幾度か膝の進むを禁じ得ませんでした、夫人が婢女を愛撫せらるゝの懇到なること實に其道を得て遺憾なしと申すべきです、夫人は尚談話の最中にも絶へずストーブの火氣に注意し、屢々立ちて石炭を投げ入れ、又女中を召して御茶を取換へらるゝこと再三、少しも油斷無く持てなされました、記者は夫人に請ふて貯金箱の仕組を拝見して御暇致しましたが、供待部屋の圍爐裏にも炭火がカン〳〵興されて御來客の車夫が大勢暖まつて居たのを見て自ら奉ずる薄く人を待つ厚きを感じたのです。

恭謙は美貌よりも一層の引力を有す
模範は教訓よりも人心に銘する事強し

兒島惟謙氏の家庭

兒島夫人重子は、北面の武士世纘甲斐守重遠氏の女にして、嘉永三年十一月を以て生れ、明治七年二十五歳にて前大審院長兒島惟謙氏に嫁し仙臺、長崎、大阪、東京と、瓦人の法官的生涯に伴ひ、今は瓦人の退隠に伴ふて大森に在り、人と爲り貞淑にして忍耐力に富む。

大森八景園を北に去る三町ばかり、神寂びた山王の祉を左に見、歩むこと僅かにして右に蒼海を控へた處に、前の大審院長兒島惟謙氏の御邸があります、田面の刈株は霜に瘠せて縮まり、畷道の芒穂は日増にうつむいて、枯色を染め出した十二月の中旬、此御閑居を訪問致したので、爪先上りの御門前は、兩側に丈のよく揃つた小松がづらりつと並んで、丁度衛兵のやうでありましたが、左の低地に古

い百姓家が一軒、稲叢の間に見へて、一層嚴肅な御門側を浮起して居りました、小松の行列盡る處に冠木門があり、檜の古木に南天の紅きをあしらつた植込を廻つて、御取次を乞ひ、羆熊の毛皮を敷いた御玄關より、廻廊を歩んで十七疊の客間へ伺ひましたが、此處には熊、臘虎、栗鼠の毛皮數多敷き列べ、御床の間には珍らしい大きい切株の臺上に、唐製獅子の置物を据へ、違棚には蒔繪の手文庫二つ三つと、曲線一脚を置かれ、前に土佐繪の金屏風あり、四方の小壁に舞樂の圖數多掛けられてあり、南東廻り椽の硝子戸から見ゆる廣い芝生の御庭先には、赤松、姫小松、梅の古木など參差配列し、長く延びた百日紅の枝の下に、大森田甫を見渡した風情は、丁度パノラマの觀がありました、此處は高臺で全村一目の中に集り、群青を流したやうな海原に、眞帆、片帆が靜かに浮び、房總の山煙の如く、沿岸の松林淡黑色を呈して、前景黄赭色の田園と對照美しく、暇道を往來する村民の姿、軌道を疾走する汽車の煙など、靜中に活動を與へ、何時までも見飽かぬ妙趣のある上に、硝子越に差込む暖かい日を背に受けて、殆んど樂境に入つた心地してある處へ、左手の楷子をしづしづと降り、此室に來られし夫人は、鼠萬筋の紬の綿入に、黑龜綾の被布を召され、白髮の少し雜つた御髮を小さい束髮に、堅々と結ばれ、面長の御顏に細い切長の目元、癖のない鼻、尋常な口元は、其昔緋の袴引き給ひし御俤を忍ばれ、冴へぬ御血色と御年よりふけた額の皺は、幾多精神的の艱苦を嘗め玉ひし事を想像されました、靜かに坐に着かれて御挨拶あり、飾のない御話しの內に無量の御趣味を含まれ、未だ脫けやらぬ京言葉の調子優しく。

▲旅行　以前はよく大磯や鎌倉などへ海水浴に出掛けましたが、

此處へ移りましてから見晴はよし、別段旅行を致す必要も御坐いませんので、何處いも參りません、夏分は此處の海で海水浴を致しましたが、近頃はモー子供だけて私は入つたことは御坐いません、ハイ四季とも眺めは宜しう御坐いまして、月や雪には尙更何とも言はれません、月の出は此坐敷から眞正面ですが、二十六夜にはいつも待つて居る根氣が無くつて、一度も見たことはありませぬ。

▲昔の旅　東海道の昔の旅は二度致しました、一度は主上の御供で江戸まで參り、一度は其後京都へ引返へし、取片付けを濟して、自分が主人となつて江戸へ上りましたが、道中は鋲打の駕籠で通し、朝は晩く立ち、夕は早く旅籠屋へ着きますので、旅籠屋の座敷まで駕籠を横付けにしたものて御座います、道中は駕籠の御簾内から外を見るだけて、一寸御簾を掲げても近侍の者に八釜しう申されますので、却々窮窟な事で御坐いました、尤も煙草盆は駕籠の内にチヤント備へてありますので、退屈を凌いで居りましたよ、警護の士は宿繼ぎにして、控へろ〳〵て威張つて通りましたので、唯今皇后陛下が行幸遊ばす時の方が却てお手輕で在らせらるゝ位、今考へますと誠に勿躰ない事だと存じます、一度桑名から熱田まて仕立舟を獻上された事がありましたが、舟は黑塗て葵の紋散らし、中は朱塗て紫の幔幕を張り、舟手は社紆て漕ぎました、イヽエ熱田へ參詣どころでは御坐いません、舟を上ると直に又駕籠で通したのです、江戸へ着きましたつて見ますのは西丸の御内だけて、一足も外へ踏み出すことは叶ひませんから、江戸は何樣な處だかよう知りませんでした。

▲御奉公　八歳から廿五歳まで御所に居りました、ハイ孝明天皇

樣の御殿へ御勤め致したので、……御所へ上りたては年もゆきませんし、何んだか夢中で勤たのですよ、昔はモー幼い御奉公人の外出は少しも叶ひませんし、兩親の大病でも中々一寸歸宅の御許しは出ません、十三歳になりますと、三月の十三日に初めて嵯峨へ智惠もらいと申して詣るのが常例で、是れを外出の初めと致してあつたので御坐います。

▲服裝　御奉公中表向きには模樣物に限つて居りました、地色は鶸、紫、赤など樣々です、振袖は十六歳で留めますので、十六歳の六月十六日に御上より直徑八寸位の大きい御饅頭を頂き、其眞中に一寸付いて居る紅の處を萩の箸で突いて孔をあけ、其孔から御月樣をのぞきまして夫れから袖を切るのが御定例となつて居りました、切た袖下は皆傍輩方へ分け送るので、若し惜んで疊み込んでゝも置くと、室頭に大層叱られましたのです、袖留めの折は御祝儀として鰯、樽、雜魚、羽二重の反物などを御上より給はるので御坐います、留袖は一尺二寸位ですから、初の内は窮窟のやうな氣が致しますよ、緋の袴も打着も隨分長い間着ました、洋服で御坐いますか、是れも以前は可なり着ました、近頃はモー斯樣な田舍へ引込んで何誰樣とも御交際は致しませんし、此通り一寸も搆ひませんので……

▲髮　昔の稚子髷は唯今の令孃方の風とは違ひますネ、畏れ多う御坐いますが今上帝御幼年の御頃は、矢張り稚子髷に御あげ遊ばして居らしつたのですが、御前髮を廣く取り、兩方の御輪が横にづつと開いた御格好に御結ひに成つたので御坐います、私共年若の折は、竹の節と申して後は島田の一のやうで、中程をしばり、前はぐるりと擴げた髮にも結ひました、一人前になつてからは、下げ下地に結

つて居つたのです、束髪は流行の初めから賛成致しまして、是れに計り致して居ります。

▲和歌　和歌は極好きな方です。御奉公中は歌子と一處の室に居りまして、彼の人に學んだのですが、餘りむづかしさに中途で倦んで止めたくなると、御師匠さんの歌子に勵まされ〳〵致したのです、御上が御庭を御歩行の御供を致し、梅林や櫻の樹の下で一寸御當坐が出ます時などは、いつも出來ないので困りきりました、偶には宿題にして頂いた事も御坐いました。

▲習字　京の梅谷流を習ひましたが、近頃はさつぱり書けません、今の跡見花蹊さんが初めて御前で御書きの時の樣子を、私はよく覺へて居りますよ、たしか間宮豆子と一處に席上揮毫を仰せ付けられたのですが、花蹊さんの方では知りますまいが、私は御上の御側に坐つて居りましたから、よく見て居りました、花蹊さんは誠に奇麗な可愛らしい御顔でした。

▲小説と新聞　御勤めの内は馬琴の作や、膝栗毛なども讀みましたが、八犬傳は中頃までの處が極面白う御坐いますネ、唯今の小説類も見ますが、一番歴史物が好きなのです、今度の文藝倶樂部にはオセロと云ふのが出る相ですから、讀みたいと思ふて居ります、新聞は時事、日本、朝日、報知を取りますが、むづかしい處は讀みません。

▲能と舞樂　御所の表向の御催しは舞樂ばかりで、紫宸殿で御催しに成り、毎度拜見致しましたが、譯がよく判りませんから、矢張り能の方が面白いと存じました、此額は舞樂の繪卷でありましたのを、幾つにも切つて人樣へも分け、殘りを斯樣やつて額に致したの

ですが、土佐流の名畫であつたのを惜しい事を爲た物だと皆さんに笑はれたのです。

▲演劇　主人が芝居嫌ひですから、私もとんと見た事は御坐いません、昨年親戚の者が宅へ養生に參つて居つて、其待遇の爲めに歌舞伎座へ參り、初めて團十郎を見ましたが、あれが見初めの見收めだつたのです、どうも初めての芝居見物で、中の樣子は少しも分りませんから、娘(西園寺公成氏夫人)の案内で、やつと見物したやうな次第で御坐いました。

▲婚嫁　宿へ下りましたのは廿五歳でしたが、嫁入りのため宿へ下るのは私が初めて御坐いました、〇〇は私より四ツ五ツ若かつたのに、其時私に向つて自分も直にあとより下るからと言はれたので、未だ年も若いのに最早定まつた婚嫁先があるのか知らんと、私は心の内で左樣思つてたのですが、成程私が下つてから暫時の内に嫁入りされました、私は前に申した通り子供の時から長い間の御奉公で追々自分の家來を五人程も使ふやうになり、何から何まで家來任せで、丁度旦那樣の如くでしたから、一家の主婦となる手業は知りませず、姑は八釜しい人で、其困つた事一通りではありません、御奉公の方がいくらよいか知れないと、一時は媒人を怨んだ位でした。

▲針仕事　御細工物位は致しましたが、針仕事と云ふ物を少しも知りませんので、實に困りました、此方へ嫁した翌年に夫婦で仙臺へ出張中、丁度妊娠致したのですが、ひとつ身の裁ち方が分りません、恥を忍んで知己の婦人に尋ぬ、漸と拵へたやうな次第でした、夫れから一生懸命に人に問いたり、見習つたり致して、何樣か斯樣か主人や子供の衣類だけは人手を借りぬやうになり、主人の足袋ま

て縫ふ位になりました、夫れですから召使に始終言つて聞かせます、私は是々て針を覺へたのだから幾歳からても志さへあれば屹度出來る、御前達も其積りて勉强するがよいと申して、是れ丈は嚴しく教へて遣はします。畢竟自分が餘り困難した故てせう。

▲料理　料理も矢張り嫁入るまて一寸も手掛けた事は御坐いませんてしたが、是れも追々の經驗て、慣れるに從ふて好きにもなりまして、毎日臺所へ出て世話を致して居ります、裏の畑には野菜を作つて新らしいのを使ひますのが樂しみの一つて、當年は又菠薐草が大層よく出來ました事。

▲錢勘定　是れにも隨分困りましたよ、御奉公中は御上より戴いた大きい御金を、直に家來に渡しますから細かい御金の勘定を少しも知りません、どれが二十文錢か、文久錢か、丸て分りませんてした、オホ、、、併し只今の女官方は却々そんな迂濶ては御出てなさるまいと思ひます、御勤めは昔より御骨が折れませうが、又昔程御窮窟てはなからうと存じます。

▲手藝　細かしい手業は極好きな方て、絹綿から指先て糸を撚り出して銘仙を織らせたり、屑紙を細かく截つて小撚を拵へ、夫れて紙布を織らせましたり、又細かい拔糸をつないて幾つも毬を作り、夫れて蒲團地を織らせたりなど、始終致して居ります、蠶を飼ふのも大好きて、毎年邪魔にならぬ場所て養蠶をするのてす。

▲令孃　上の娘の方は大阪の梅花女學校へ遣しまして、次女は跡見さんて御世話になりました、自分が何も知らないので苦勞致しましたから、娘達にだけは嚴しく申し聞かせるのて御座います。

此時學校より歸り來られし拾歳許りの令孫は、手織の布子筒袖羽

縞に短かい小倉の袴を穿たれ、祖母君と記者に向つて叮嚀に御辭儀をせられました、質素な服裝と日に燒けた色澤は、左して村童と異りませんが、凜とした眉目に自から品格を現はし、二葉より芳しき栴檀の孽、祖母君の御樂しみ無かしと推測られました、夫人は見返りて輕く微笑まれ。

是れは西園寺の總領で、少さい時から此方へ引取つて私が世話を致して居ります、ハイ村の小學校へ遣はしますが、腕白盛りで着物も何も此の通り汚して參ります。

令孫は寫眞挾を持ち來り、記者の前に開かれ、是れが父母君、是れが祖父君、叔母君、又是れは伊達春山公ですなど指し示されし中、北京にて遭難せられし夫人の長子、故兒島正太郎氏の撮影像がありしを指して、是れが御亡れに成つた叔父樣でと云はれながら、夫人の顏を仰ぎ見られました、夫人は何となく沈みたる面持にて在られましたが。

▲令息の遭難　御承知の通りあの時は夢のやうで御座いました、皆樣に豪氣と申された主人も、此の爲めにはめつきり衰へた樣であります。遭難後一ヶ月も消息が分りませんで、其間に樣々の噂に惑はされて、ヒョッと無事で居るのかとも思ひ餘り、堪へ兼ねまして、今考へると馬鹿氣て居ますが、召使を方々の占者にやつて判斷を乞ひました處が、何處の占者も是れは御身内の方が御出て下さらねば咄されぬと申した相ですが、其時は最早亡くなつて居たのでしたもの、其筈で御坐いましたよ、ハイ遺骨は彼地から送られましたので、モー其當坐は却て涙も出ませんでした、私達は國の爲めと存じて諦らめましたが、次男が夫れから氣が茫乎と致しまして、學問も身が

入らず、體も弱くなつたのには困り切ります、平生父よりも兄を頼りに思つて居た故で御坐いませう、夫れ故此節は成るたけ腦をつかはせぬ樣に氣儘に致させて置くのです。

簡潔な御物語りに絶へて凡俗老媼の繰言は含まれませんが、夫人の歴史中最も強い悲劇である事は申すまでもなく、勇烈の御氣質に涙を包む夫人の御目元を仰ぎ見ては、尚更記者の同情を深からしめました、令息の遺骨は品川海晏寺に葬むられてあり、夫人は令孫を伴ひて寺に詣づるを樂しみとせらるゝ由、御話は大阪御住居の時代に移りて。

大阪時代には幾らか交際社會へも出ましたが、彼の頃馬車に乘つて歩いたのは知事の奥さんと、私だけだと申して、大層ハイカラの樣に噂されました。

▲慈善會　大阪では廣岡信五郎夫人と協力して慈善會を致しましたが、矢張春秋には能狂言とか又は生田の復習とかを催したので、切符は東京の方々にまで頼んで買ふて貰ひました、東京に移りましても澁澤さんなどと御一處に少しは會のために盡力も致しましたが、大森へ引込んでからは全然御斷り申して、御交際の場所へも出掛けませず、モー因循して仕舞ひました、又愁に一ヶ所へ出ますと彼方からも此方からも種々勸められて面倒で御座ますからネ。

夫人は花の如き半生を門閥的奥女中的の生活に過されしに似ず、獨力を以て社會に羽翼を張られし惟謙氏に嫁するに及んでは、勤儉、力行、平民的妻女の勞を甘んじ、能く良人を輔佐し、五兒を撫育し、尚進んで婦人の社會事業に先鞭を着けられたのは、其趣味百方面に行渡られた御方であると存じました、記者は興ある、御

話にうか〳〵と時を移し、大森の海面黄色の薄煙りを引出した斜陽の景致に、心付いて御暇申上、立ち出る時建仁寺垣の隙から、廣々とした菜畑が見えました。

天野博士の家庭

天野夫人瀧子は薔薇臣吉川孝友氏の長女にして、應應二年に生れ、明治十八年法學博士天野爲之氏に嫁す、其和歌に長せるは一世に認識せらる

九段の燈明臺を横に見てもちの木坂を廻つた處石階十餘段を上つて、法學博士天野爲之氏の御門あり、御玄關より伺ひ河骨を活けられた、眞正面の應接室の側から、御二階に導かれました、此御二階は中々見晴の好い御座敷で飯田町通り一帶は眼下に瞰め得可く近くは小石川神田遠くは本郷日本橋區の一部までは一目の中に集まり、御欄干に頭を出して居る松の背後から砲兵工廠の煙がユッタリ直線に立ち騰るのが烽煙のやうで限りなく壯快に感じました、西側の御床の間には紫檀の歌机を置かれ肅親王の肉筆なる對幅の一つには、脫俗書成一家法他の一つには寫生卷有四時春とあるを掛けられ北側の壁には御能の面を掛けられてある外は、十疊の御座敷が淡雅清潔に片付けられてありますが、丹色難波簾の熱調は靜中の動を感服しある處へ階下へ優しい御聲で「あの河骨を御捨てなさいよ」と命ぜられながら段梯子を上り來られ、丁寧に記者を上座に推し進められし夫人は、紺上布の帷子に御納戸色支那純子と黑繻子の晝夜帶を結ばれ、前髪の細ひ根の落着いた、丸髷に金無地の櫛笄を挿され、伏目勝の優形の御物腰は沈厚て、眞面目て、御遠慮勝の樣に見受けましたが、記者の唐突な質問を一々スラスラと淀みなく御答へ下され、御趣味の

御發表に毫も垣を置かれず、痒い處に手の届く樣に御話成されたのは、記者が深く愉快に感じた所で御坐います。

▲和歌　中島歌子さんへ參りました時分は隨分凝りましたもので、チョット道傍の石が轉がつても、直に考へると云ふ樣て御坐いました、ですから見るもの聞くもの、皆歌の方へ引込んで居りましたが、此方へ參つてからは斯樣事ばかり考へて居つては、家事を治めることが出來ないと存じて、全然止めました、兩三年前からは子供もやつと成長致して少々暇も出來ましたのでボツ〳〵始めましたが、一度中絶したものは氣抜けが致したやうで、少しも出來ません、一つは家事にまける故て以前の通りの頭腦に參らないのでせう、旅行中など、ユックリした折などは、考へるのも、樂みの一つてすが、下手の横好て……却々實物を見て考へ付くと申すのは、餘程慣れた方て御坐いませんと、六ケ敷う御坐いますね、それに私なぞは中島さんて題を頂ひて稽古致したものですから、題に縋りませんては當てが無い樣で何ですか……左樣ですよ、歌筵なぞの時は題て仕込まれた方が便利て御坐いませう、中島さんては餘り澤山の歌は讀みませんが、昔の名歌丈は暗誦する位に、讀むがよいと申されました。

▲新聞雜誌　新聞は讀賣、報知、日本、時事、萬朝など參りますが、大抵殘らず毎日讀んて居ります、論說ても小說ても悉皆一ト通りは見ますので、これは一日中の仕事の一つに致して御坐います、雜誌類は方々から頂きますが、これも成る丈見る樣に、心懸けて居ります、重なものは太陽、太平洋、實業の日本、實業時論なぞて：：ハイ何處も此處も讀みますが專門家の講義と申す樣な分には數字が澤山て頭腦が、コヂヤ〳〵致しますから、覺えて居難う御坐いま

す、讀んで樂みなのは、名士の論說とか、人物月旦とかで、御坐いますネ、解りも致さない、癖に生意氣の樣ですが、何でも讀むのが、好きでありますのに、一つは主人も忙しい身躰で、如何しても讀物の暇が少う御坐いますから、覺えて居つたら、何の參考にもならうかと存じて、一ト通りは役の樣に致して讀みますので、時としては話相手になるのに都合が好い場合も御坐いますし、又子供の質問に答へるのにチョイ〳〵便利の事も御坐います。

▲小說雜書　以前は隨分何と云ふ事なしに、澤山の本を讀んだもので御坐います、馬琴のが隨分宜しう御坐いますが、其中でも先づ、八犬傳だの無想兵衞だのが、面白いと存じました、八犬傳も終りの方になると餘り錯雜して何ですか興が少くなりますが、發端の趣向の面白いので馬鹿〳〵しいとは存じながらも、能くもマア斯樣なに引證したものだと感心して、居つたのです、私の一番好きなのは小說の中でも歷史物で御坐います、歷史物ならば日本のは申すまでもなく、漢楚軍談三國誌の種類でも、西洋の飜譯物でも何でも極好きなので御坐います、近頃は用事も多いので、小說類は見ませんし、此頃のしやれた小說は餘り宅へ、取寄せません、又昔草雙紙的のは娘共に見せませんのです、御伽ばなしなぞは時々子供が取つて參りますが、其樣なものまでチョット讀んで見ますよ、ホントウに讀む事は好きで〳〵、ハイ隨分多感な性質ですから、身が入るので御坐いませう。

▲演劇　子供に見せられませんから、十八年以來芝居を覗いたことが、御坐いません、先日築地まで病人の見舞に參つた時、歌舞伎座の前を通りまして、始めて座の規模を見ましたと云ふので、笑は

れましたので御坐います、以前は極芝居好きで代り目〳〵には殆んど缺さず新富へ參りました、私の芝居見物で最も深く記憶して居る、狂言は黒田騒動で御坐いました、彼の時は菊五郎の紅葉上人彦三郎の栗山大膳で、オヤ貴方も御覽でしたか、紅葉の間タテで、大膳が主水に意見致すところは、實に好う御坐いましたネ、それから助高屋が未だ訥升時分でお秀の方、黒田の殿樣がタシカ宗十郎だと存じましたが……ハア左樣〳〵左團次でしたつけか、彦三や仲鶴はホントウに名人で御坐いましたネ、私は總べて世話物狂言より時代物が好きですが、一體に殘酷なところは嫌ひで御坐います、見効者な方は世話物が御好きですが、私は餘り面白く感じません何ですか、現在の儘を目の前で致す樣で……

▲音樂　洋樂は結構で御坐いますが、私は耳が御坐いませんので……琴は生田の方で、山室に習ひました、山田は賑かで、當節流行で御坐いますが、未だ能く伺つた事が御坐いません、併し大概歌なぞは似て居る樣で御坐いますよ、琴は自分で致すのも好きで御坐いますが、三味線は致しません唯上手の方がなさるのを伺ふのは大好きで、長唄の勸進帳なぞ、實に宜しう御坐いますこと、彼の芝居の出語して大薩摩を彈かれますと氣が晴れ〳〵致します、俗曲の中一番好きのは、義太夫で、調子を合せる、音を聽てもゾッと致す程好いので御坐います、但大嫌ひなのは新内で御坐います。

▲謠曲　主人が能の方に熱心で實生流を少しやりますので、私も一層好きになりました、當節は御婦人の間にも大分行はれて隨分小皷など上手になさる方があります。

▲書畫骨董　自分には出來ませんが書畫共に拜見致すが結構で御

坐います、畫は浮世繪も文人畫も好きですが、何流でも餘り、コッテリとした極彩色より淡泊な墨畫が好いと存じます、骨董は主人が好きで財政さへ許せば深入り致したい方ですが月謝が高う御坐いますから如何もホ、ハ、ハ、私も博物館や美術展覽會の參考品なぞを見ますのが、實に樂みなので御坐います。

▲花　花は活けて樂んだり、庭の植木をいぢつたり。眺めたり致すのが、一日の中の生命で御坐います、餘り氣を揉んでいぢり壞しますと何の花が一番好きかと御尋ねになりましても、何れが好ひと申されませんね、櫻は櫻で好し牡丹は牡丹で好し、皆それ〳〵に風情を備へて居りますから、一體花と云ふものは、時候に善く釣合つて咲き出るには感心致しまする、寒い時分には梅の凛々しいのが、似合ますし、暖かく陽氣になつた、頃に櫻が咲いて長閑な人心に適ひますし、夏は河骨や澤瀉の樣な水物が、アッサリと伸々して、如何な涼しさを添へますてせう、それから萩桔梗なぞは丁度シンミリと優しい秋に釣り合ひますが、若し炎暑の最中に櫻の樣なコッテリとした物が咲き亂ましたら、如何に櫻でも、名花とは稱へますまいと思ひます、其樣な加減が致して私は一番躑躅を好きません彼花は少し暑くなつてから、眞赤な花が咲く故てくどい感じが致すのでせうが、花のない樹木類も總躰好きて庭木なぞ何れかと申すと、天然の儘が宜しう御坐いますが、庭は又掃き清め度ひので御坐います。

▲動物　猫よりは犬が好きですし、蟲類の聲を聽くのも好きですが、總躰植物に較べると趣味が御坐いません。

▲旅行　主人は鎌倉好きて毎年夏になると參ります、私は海へ入つた事は御坐いませんが海の岸で眺めて居りますと、終日でも飽き

ません、變り行く雲の色合や、曳き上げてある漁船の形から漁夫の姿まで一々面白く感じまして……、日光へも一度參りまして、佳い處だとは存じましたが、産後また身躰の弱つて居る時に、病人の世話旁々參つたので、鎌倉ほど樂しく存じませんでした、風景と申すものは、自分の身躰の加減の良否によりて、餘程違うものだと思ひますよ、花見には向島へは參りませんが、上野だの飛鳥山なぞへは出かけます、旅行はホントウに樂みなもので、畦道を農夫が鍬をかついて歩いて居る處なぞ見ると、ソッとする程愉快で御坐います、其樣に好きでありながら、チョッと踏み出すとが、オックウで東京者の癖に東京を能く存じないので、御坐います。

▲江戸子　江戸子は何でも開放で一方から見れば馬鹿とも言はれるのですが、其代り竹を割つた樣な氣質で御坐いますに、過日も宅へ參つた書生が東京人はペテンがあつて怖いなんて申しますから私は默つて居れなくなつて、それは東京へ來て居る地方人を東京者と見做のであらう、純粹の東京者は表裏のないが特質です、私を東京者を知て言つたのなら聞捨てにはならないと、爾う申してやりました。

▲令嬢方の學校　十八歳になります、長女は當年の春お茶の水の高等女學校を卒業しまして、それから當人の望みで津田さんの英學塾へ通つて居りますが、當人は大層先生をお慕ひ申して居ります、次のは取つて十三になりましてこれも本年から、女子學院へ遣はしました、矢島さんも津田さんも家族的の教育をなさいまして、私の望み通りな御方針で御坐いますから、如何に安心か知れません、如何致しても一つの宗教を基礎となさつた方が宜いと存じますよ、末

のは十歳で御坐いまして、未だ番丁小學校へ通つて居ります……イエ樂みと申すより心配で御坐いますが皆自分丈の身始末は私に世話を燒せません、私は娘達を一藝に過れた者に致したいとは望みませんが、何卒一家を治め、子を育てるに差支無い樣に縱令淺くとも汎く學ばせたいと願つて居りましたが兩人共善い學校へ任せて滿足致して居ります、

▲裁縫　必要上から毎日怠らず致して居りますが、好きか嫌ひかと仰せあれば好きでない方で本を讀む方は樂みが深う御坐います、

▲衣服髪飾り　サツパリ趣味の無い方で、昔から間にさい合つて居れば構ひません、一躰流行を趁ふのが嫌ひなので御坐います、髪も不器用で束髪に結べませんから、丸髷にばかり致して居りますが、ついぞ合せ鏡を致したことが御坐いません、併し束髪で御美しい方を見ると束髪も宜ひと思ひ、島田でお立派な方を見ると、島田も宜ひと思ひ一向、定つた嗜好が無いので御坐います。

▲料理　一躰は食物に構はない方でお芋でも午勞でも有合せもので、澤山でしたが、主人が少し食物に高尚な方で、私も料理に就て心配致します故か、大層進化致して、弦齋さんの作じやありませんが、食道樂になつたつと皆と笑ふのです、尤も主人は御酒も煙草も頂きませんし、お菓子でも一個の唐饅頭を半分位しか戴きません、それで濃いお茶でも一杯飲めば充分なので極行儀の宜い方ですが、但一日の快樂は晩餐の食膳にあると申す位で、取り合せ物に色々考へが入るので御坐います、私も日々の料理方に困りますので、西洋料理も少しばかり稽古致して見ましたが、全く日本料理より經濟で時間もかゝりませんに、畢竟原料が高い樣でも附け味が入らないの

てせう、西洋料理の附味は先ア鹽と胡椒位で脂肪もラードを、用ひますと餘りかゝりません、可笑しいお話を致す樣ですがラードが一罐三斤入れが、八十錢で宅など四五人宛の見當にいたして、一日一罐あれば充分で御坐います、日本料理は少し氣取つて致すには鰹魚節、味淋、砂糖の類が隨分入りますのに、時として二三個所位に火を起すので炭が大層違ひますそれに西洋料理は貯ひ置きが利きまして、スープなどは拵て時の經つたのを良いとしてありますが、日本の御吸物などは、爾うは參りません、餘程拵ひて出す時間の工合も六ケ敷、少し複雜な料理の時は四時(午后)頃から女共に準備を致させて、それから、私が參つて調ひますが丁度六時の膳に上る樣な工合です、併し日本料理の方は料理を致しながら、此鹽燒に何を添へ樣か此照燒に何を添へやうかと、衞生上からも、躰裁上からも、酸ひ物甘ひ物の工夫を凝らすのが、出來ない癖にまた樂みなので御坐います、一躰日本料理はツマが手際なのてすネ、私が赤堀さんへ、初めて稽古に出ました時、丁度其日の大献立の日て口取に鯉ごく、鯉の洗ひなどでしたが、此洗ひは大根を細く長く剝て皿の上に瀧の形に拵ひ鯉の身を處々に置て瀧上りの趣きに仕組んだのてすが、私は其大根を拵へさせられて、困り切りましたから、一日丈て止して仕舞ひました、如何も先生の御手際の奇麗なとと申したら櫻や牡丹の形を庖丁でお作りてすが、實に造作なく、見事に出來ますに、私自身が料理て苦しみますから、娘共には此頃會席の稽古を始めさせ昨日(九月六日)も其稽古日て私も終日マゴ〳〵手傳ひましたが、日本人は食物に就て衞生上の理窟が判らないなどゝ申しますけれども、會席の料理など氣を付けて見ますと、却々自然と法に適つたものだと

思ひます、金柑九年母などの酸味よせ物などの甘味蕗葵などの辛味此内の何れかを魚類に取合せるのは、消化にも滋養にも有効て風味の調和配合は如何にも巧みなものですね、昔から理窟は知らないても自ら理窟に適つて居るものだと、ツク〳〵感心致すので御坐います。

▲禪道　夫人は記者の住所を聽かれてそれては青松寺の御近邊て入らつしやいますか、私は月に一度彼の寺へ參つて、元峯上人の禪談を聽きますが、普通の說敎のやうに地獄極樂などの話は御坐いませんに、先達の說敎は頓死幸福論て御坐いまして、私の豫ての希望と一致いたしましたから、大層面白う御坐いました私は平素爾う思つて居ます、人間は長病を致すと、世話する人に迷惑を掛けするばかりでなく自づとひがみが起つて大切な覺悟が亂れますから、成るべくは働ける丈働いて頓死致したいと元峯上人は私の希望通りを御說敎なさいましたのです。

夫の趣味は天然、人事、料理、藝術、文學、宗敎、其他に涉り其眼光玲瓏透徹微を現はし細を穿たれて居るので記者は幾度か膝の進ひを禁じ得ませんでした、記者が長坐を詫びて坐を離れ御玄關へ出ましたとき應接室の河骨が美事な葉蘭に活け變へられてありました。

片山博士の家庭

片山夫人照子は、薩摩臣田邊孫次郎氏の長女にして、三宅雪嶺氏夫人花圃女史の從姉なり、文久元年を以て生れ、明治十二年を以て今の工學博士片山東熊氏に嫁す、天性重厚にして花圃女史の才華煥發なると絕好の對比なり。

晴れるかと思へば又降つて來る五月雨空の朝、赤坂丹後町なる祖師寺の前に長塀を遶らしたる御邸へ伺ひました。取次の人をも勞せず、御自身に出迎ひられし夫人は、二十餘年前牛込の書熟で折々御目に掛つた御容子と變りなく、唯だフサ〳〵として丸髷が小さい束髪になつて居られたばかりでした。秩父銘仙の袷に黑七子の羽織、時候にあはせては其厚着のやうてすが、平常皮膚の御弱い方てあらるゝ故てせう、久々にての御目もじに、教師本多錦吉郎氏及び同窓生に關する昔話ありて。

▲書、　年を取つて子供のないほど寂しいものは御坐いません、其割に何にも出來ませんよ。書も半途て止して惜しいことを致しましたが、男の生徒が多勢て嘲されたのて忍耐が出來なくなつたのてす。一躰私は母が寡婦て因循一方に育てたものてすから、怖々ばかり致して居つたのてすよ。本多先生はホントウに親切て、教師としては完全な方てすに、片山の友達にも大分先生に學んだ人がありまして、毎度先生の御噂が出ますよ。建築と書とは關係の離れたものてすから、少々習ふた書が片山の話など聽くには大層助けになる樣てす。

記者は屏風の書「橋下の鷺」を指して伺いましたところ、大層夫人の御氣に入りの品て、

あれは永德てす。左樣てすね、光琳の風に似て居りますよ、能くは存じませんが光琳は狩野から出た宗達と光悅を融和して一機軸を出したのてしたが、外國ても光琳の書を模樣に使ふさうてすね。あの三幅てすか、あれは落欵がありませんが、探幽だろうと思ひます、眞中の鐘馗の顏が黑田清輝さんに肖て居るつて、皆さんが御笑ひなさいます。あの洋書の方ては舶來の色摺に佳い物が御坐いますこと、

草花など實物の色が眞に其儘に寫して御坐いますが、近頃は大分日本畫風の枝ぶりに品を付けて畫いてあると思ひます。ハイ片山も畫は大好で、片山の兄(陸軍監督監片山中行氏)も極熱心な人ですから隨分古いのを持つて居ります。丁度預つて居る品がありますから、少し御目にかけませうか。

記者は夫人の御厚情に甘へて、名作の古畫を拜見致しましたが其一二を擧ぐれば、啓書記の觀世音、探幽の三聖嘗酷、光琳の富士、抱一の草花、梅逸の花鳥、容齋の夜討曾我、狙仙の猿、狸を始めとして、珍幅數へ切れませんでした。平生深く斯の道に注意あらるゝ上に、斯樣な御趣味の空氣に包まれて居らるゝ夫人は、天性の雅趣を一層高めらるゝ事と存じて、羨望に堪へませんでした。夫人は展覽會で落款の不分明な物を御覽になれば、御歸宅後必ず畫家人名辭書で調べらるゝとの御話でした。

▲旅行　旅行は大好で、其中にも海の方が一番です。よく人は海の音を聞くと哀れに寂しいとか言ひますが、私は却つて氣が晴々としして快活になります。私の實家は舊幕臣で維新後沼津へ參り、明治七年まで片端町に居りまして、始終海邊で遊んだ故で、斯樣に海が好きになつたでせう。あの鵠沼には親戚がありますので折々參ります、彼處の海は遠淺ですが、浪は中々暴い方です人氣は極質朴な處ですよ、私は一躰田舍の風俗や景色が大好で、何時も住みたいと思ひます、あの蘆葺屋根の恰好だの、夕方漁師が裸躰で濱邊へ出て居る色合なぞは、宛然畫のやうで……勝景に望んだ時ですか……左樣ですよ、歌よりも畫にしたらばと考へますに。

▲和歌　少しの間中島歌子さんへ參りましたばかりで何にも出來

や致しません。佐々木信綱さんの樣な新派の歌は却々六ケしう御座いませう。

▲新聞雜誌　元から時事を見て居りましたが、日清戰爭の時分には日々を取りました、日々は戰爭に就て却々詳しくつて報道も敏ふ御座いましたから……新聞は論說が好きでして、凝つて見て居るうちに用が出來ることが多く、三面を見る暇が無くなります。「太陽」なども矢張り小說までは滅多に讀みません。併し女が人の前で論說の事など話すのは、西洋人でさい忌むさうですから、私も決して人に語したことはないのですが、唯だ見るのが好きなのです。

記者は質問會といふ會のあつたのを思ひ出して、唐突ながら其成立を伺ひました。

さうですね、女子敎育が勃興した明治十二三年頃、柳谷謙太郎さんが、米國からプリンス、イサベラとプリンス、メリーの姉妹(彼地で學校を開いて居た人)を連れて歸られ、高等女學校の敎師にしました。其後十年ばかり經つて森有禮さんが亡くなつて、一時女子敎育が頓挫した時分、解雇になつて暫くマゴついて居ましたのを、柳谷さん始め二三の人が氣の毒がつて、岩崎の家庭敎師(イサベラは裁縫家政、メリーは學理)に住み込ませ、他の華族方に御世話したり、又會費三十錢宛で質問會といふ會を起して姉妹を講師にたてたのです。姉妹共品行の善い人で、姉さんは丁度細君のやうな人で、萬事世話を致して居ります。彼の武田錦子先生や津田梅子先生も、此の質問會には御盡力なさいました。私は高等女學校へ少しの間參りましたが、其時分加藤さん今の武田錦子先生に御厄介になりました。其後質問會で時々武田さんの通辯を伺ひましたが、實に御達者な者ですこと、

西洋人の語す間はヂーッと落着て聽いて居らしやつて、一くぎりになるとチョット西洋人に目くばせ成さいまして、それからスラ〳〵と通譯演説をなさるんですか、洋人の、言葉の足りない所は補ひ、順序が正しくつて又別り易く、其御容子の立派なること、實に恍惚する樣でした。僅かの間ですから御馴染申しは致しませんでしたが、學識と柔德と備はつた眞に婦人の模範だと始終お慕ひ申して居りました。津田さんは御若いこと、今でも全然御孃さんですね、爾うして御心の清いこと、天女と云ふのは彼の方でせう。

此時チョット來客との取次があつたので、夫人は立つて行かれました。其間に欄間の珍らしい彫刻をツク〳〵拜見致しましたが、養老の孝子と源平八島の戰とが欅の裏表に彫られ、其刀痕が大膽で雄健なのに感服致しました。やがて出て來られし夫人に其由來を伺ひましたところ、これは芝公園に住はれた時の御宅が昔し將軍の御休憩所であつたさうで、其處の欄間を其儘用ゐて普請なされ、又今の家を建てられる時に持つて來られたので、全躰に赤黑くして艶々として居るのは、其むかし香爐の烟で燻つた故でせう。尙ほ違棚の襖は、白茶地に萠黃刺繍の唐獅が二疋向合つて居る如何にも珍らしい意匠でしたが、これは能狂言の衣裳の切れ地なので、神官などに扮するとき、袖の紋樣に付くものだそうです。

▲小説　小説は好きです、一葉女史とは懇意でしたが、彼の方の小説は實に別ですね、其中にも優れた作は「たけくらべ」「濁り江」などだと思ひます。濁り江とは旨い題を付けたもので、あれを泥水としましたら、チョット厭に聞えますが、同じことでも濁り江と云ふと大層好いぢや御座いませんか。私が女史に感服しますのは、作は申す

まてもなく題の付け方の好いのです、チョット手帳の表紙にも雑記とか備忘録とか露骨に認めないで、宮城野とか何とか寓意的になさることとてした、尤もこれは婦人に相應しい付方と男子に相應しい付方で御座いませうね。　飜譯小説では若松静子、歴史物では澁柿園の方が好きて御座います。柳浪のて御座いますか、あれは思想は感心しませんが、唯文章が上手なのて見ます、蘆花の「不如歸」は評判の作てすが、ツイまだ見ません、弦齋のは上品てはありますが、何時も同じ樣て格別面白くも御座いませんね。脚本は坪内先生のを見たゞけてす、餘程上手なのてなければ厭て御座いますから……

▲能樂　近頃の芝居見物は商人や會社員て持ち切つて居るかと思ひます、其他の上流の方々は大抵「能」を御覽になりますさうてすね。先づ第一は淺草の梅若、其次は賓生會、觀世て、芝の能樂堂は舞臺は立派てすが、近頃善い人が出ません。　梅若は御承知の通り毎月十六日と定まつて居ります、私なぞは滅多に參りませんが、貴族方は席を定めて置いて御出てになります、梅若は元青山家の舞臺てあつたと聞きましたが、却々立派て御座います、棧敷は二疊が一室づゝて御座いまして、周旋する男も御座いますが、決して其男に祝儀なぞを遣る賤しい風はありませんし、全躰の仕組が極上品て御坐いまして、御辨當も御持參の方が多い樣てす。　能見物をなさる方は皆始終謡の本を手に持つて讀みながらちよい〳〵無臺を見て御出てゝす、能も平生謡を聞かない方には興味が淺さう御坐いませうが、上手下手丈けは初めて見る人にても判ります、上手は身躰の据りが違ひますもの……。　イヱ幕と云ふものはありませんて、狂言と能と一齣づゝ交代ですから、チョット立つ間もない樣に面白う御坐います。左

様で御坐いますネエ、狂言も能も各自好々が御坐いますよ、一躰能役者が舞臺まで參つた時よりも、謠ひながら橋掛りへ出て參るときの方が、趣味が深いので御坐います。

▲音樂　何でも好きて、長唄なんぞも自分は致しませんが、度々聽き慣れて居りますから、矢張り樂みが深う御坐います、慈善會の音樂會切符は能く買いますが、召使にやりましても聽きに參りませんので、惜しいと存じて私が參ります。

▲圍碁と角力　碁は出來ませんが、見て居るのが大好きて、假りに自分を白とか黑とかに味方を定めて見て居りますと力が這入つて少しは活死が判つて參ります。角力は一度も見ませんが新聞の勝負付を見るのが樂みて、毎日氣に致して見ますから、能く覺えて居りますよ。

▲夏と冬　夏は元氣が好くつて、朝早く起きて洗濯を澤山致したり、張物を致したりすると、ホントウに心持が清々として居りますが、冬は意氣地が御坐いません、矢張皮膚が弱い故たらうと思ひます。併し近來庭いぢりを始めましてから、大分丈夫になりました。

▲園藝　片山が園藝を致しますので、私も全然花屋さんになりました。刈込も植木屋を一々頼むと大層ですから、低い處は大抵私が致します、チョット御覽遊ばせ、

と夫人は玻璃障子を開けて庭下駄を直され、廣い擂鉢形の前庭をダラ〳〵と下りて土橋の掛けた池の邊まで導かれました。此時小雨がバラ〳〵

と降つて來ましたので、引返して蝙蝠傘と花鋏とを携へられ、今度は裏庭を花園へと案内せらるゝ時、夫人は飼犬が裾にまつはるのを

愛されつゝ、植物園式の廣き花畑を廻り、白百合の香を慕ひ來る胡蝶幾羽を見送られつゝ、

蝶の珍らしいのが何時も澤山來まして、動物學者が網で取りに參りますよ。花が御入用なら何時でも入らつしやい。此白百合を津田さんに上げたらさぞお喜びでせう、菖蒲は日本のと餘り變りませんよ、強い花ですこと、此のレットボーカーは本當に烟突掃除の器械に似て居ります。薔薇は芝公園に居つた時、モット澤山育てまして、これたけは種類別にして寫生して置きました。

白百合、海芋などを惜氣なく切られ、寫生せよとて與へられ、白いのばかりでは調子が惡う御坐います、罌粟も持て入らッしやい。ハイ最早毎日笠も被らずに草むしりですから、顏も手も眞黑で外へ出る時には、糠で洗ひでもしなければ見つともない位です、併しお陰で肥りましたこと。これ　けの花に水を遣るのは隨分一役です、肥料は重に木の葉ばかりで御坐います、澤山の落葉を穴に埋めて、三年ほど腐らしたのが上等の肥料になります。溫室は片山が留守でダイ無しになりました。

溫室の中には、臺灣の蘭、日光の苔、其他面白い植物が數多く列べられてあつて、夫人はこれに就き、一々記者の質問に答へられ、記者は花の香と夫人の厚情とに醉ふて時の經つたのを忘れて居ましたが、降りしきる雨に促されて、惜しきお別れを申し上げました。頂戴した花束を提げて茫然と。

三宅博士の家庭

三宅花圃女史は舊幕府五舟の一人、蓮舟田邊太一氏の長女なり、明治二年を以て生れ、二十四年を以て雪嶺三宅雄次郎氏に嫁す、人と爲り慧敏練達、文藝女工料理に到るまで手眼共に高し。

朝からの霧がすつかり晴れて、秋蟬の亂聲が殘りの暑さを勢ひ付けた九月五日の午前十時頃、赤阪新阪町の百日紅の吹き亂れて居る御住居に伺ひました、先頭より腦と胃の神經痛に犯され、靜養して居られる由でしたが、今日一寸御快ひとて直に出で來られし女史は、御病中ながら天成の艶かな御肉色は、少しも沈欝の處なく、細面に鮮かな眉毛、張のある御目元に無量の愛嬌を湛へて、最も簡明に御話し下さいました、丁度御藏書の虫干と見へて、御緣にも御座敷にも和漢の古書新書が算を亂して列べられてあり、床の間に堆く積まれた和洋の本は、床板の見えない程でありました、四方小壁に掛けられた日本畫、油畫、水彩畫の額に一として卒のない中にも、第一目に着いたのは外國美人油畫の寫眞で、專門家の粉本によく見馴れた物、幸に女史に願ふて其の由緒を伺ひました。

▲ポトカの由來　これは美人ポトカの肖像で御坐います、私の父が持て居りました畫で、下らない物だと思ッて藏へ押し込んで置たのですが、主人があちらの博物館で此原圖を見、又由來を聞いて參ッて初めて眞價が判りまして、夫れから大切に致し初めたので御坐います、此のポトカと申す女は極卑しい身分で在つたのが、絶世の美人だので伯爵夫人にまで出世致したとかで、婚禮の席などには立身の緣喜に必ず掛けるさうです、原圖は布で覆ふて大切に保護してありますと、此方の油畫はレストリーと云ふ題ですが、小牛と小馬の工合から後の人物が如何にも好く出來て居ると思ひます、一度博物館の參考室へ出しました彼の鴎外先生の月草と云ふ本の中に、大

層褒めて御坐いましたよ。

▲習書　初めは跡見女學校で習ひましたが、十六の時自分から好んで曉齋さんに就きました、其時分は實家も何樣か斯樣か暮して居つて、御供が隨いて馬車で通ふと云ふ風でしたので、却つて本當に修業が出來なかつたのです、曉齋さんは隨分亂暴の評判もありましたが、弟子に對しては誠に深切な人でした、一體女の弟子は大抵斷つたんですが、私だけは非常に愛して呉れて、合作などする時にと、先生が布袋を書けば私が袋を書き、先生が鐘馗を書けば私が鬼を書くと云ふ風で、丁度子か孫のやうに致して呉れたのです、其頃は先生も僅四疊半の家で困つて居た處へ私が相應にして參るので、何か卑しい目的で敎へるやうに思ふた人もありましたらう、併し曉齋は其樣な骨なしぢやあ在りません、實際貧富の差別なく叮嚀でした、今でも彼の先生の事は忘れられません、モット學べばよかつたのですが、何しろ番町から本郷まで馬車通ひは如何にも御大層なので、僅か一年半しかまゐりませんでした、一躰私は元から洋畫の方が好きで、水彩位までやりましたが、一寸よい敎師が無くつて深く學べませんでした、併し小供には是非水彩畫を習はせたいと思つて居ります、主人も元來洋畫が好きでして、近頃漸々嗜好が深くなつて參りました。

▲書　習字は隨分凝つて致しましたが、近頃はトンと出來なくなりました、ハイ顏眞卿と王義之を學んだのですが、主に王義之を長く學びました、松華堂や千蔭流も王義之の別れて極宜しう御坐いますが、先づ女には王義之の風がよいと思います、唯今の多田親愛さんの書も却々結構ですネ。

▲骨董　唯今は大抵手元には御坐いませんが、父は骨董道樂で、書畫や眞黑い物を支那からも隨分買い集めた位ですから、鑑定も上手でした、其の側で癖が付いたと云ふ譯でしようが、私も以前は少し鑑定も遣りました、骨董店の前を通ると一寸立止つた位で、一度鎧を買つて笑はれた事がありましたつけ。

▲書見　小さい時分から樣々の本を見ました、夫れは〳〵は御話しには成りませぬ、是れは今より却つて自由でしたので、白縫物語時代加賀見などの草双紙を始として、十二三の時代は、漢楚軍談、三國誌、源平盛衰記などの軍談物を好んで讀みました、馬琴の作も隨分見ましたものです、滑稽本では和合神七變人、膝栗毛など總べて何んと云ふ事はなしに好きで〳〵一生懸命で讀みました、一體小さい時から小說を亂讀するのは害あると云ふのは尤もの事ですが、又讀む人に依て一概に左樣とも申せますまいネ私などは卑猥の處を讀む時には反動力を起して精神の修養になるやうに感じましたよ、尤も大悟の域に達した者でなければ左樣も參りますまい、……左樣ですネ、隨分馬鹿氣て居ると思つても、感じて涙を溢す事がありますとも、此頃の作はさつぱり見ませんが、子供が又私に似て非常に本好きで、時々色々の本を持て來て私にも見ろと申します、此間も不如歸を頻りに勸めましてトウ〳〵皆讀みましたが、矢張り涙が出まして、昔も今も愛讀の書と御尋ねならば、先づ徒然草、花月草紙などで御坐いましやうか……。

▲新聞　色々參りますが私は主に讀賣を讀みます、先ア女には彼樣な新聞が適當でせう、見ますにはスツカリ廣告までも……、新聞は樂んで讀むと云ふより、必要て讀むのですネ、小供は數多い新聞

を殘らず讀ますよ。

▲音樂　昔の風習て俗曲は女子の躾の主になつて居ました上に、私の實家の家庭は極派手でしたから、七つから仕込れました、琴は山勢、長唄は杵屋お六を呼んだのです、お六は勸進帳を拵へた六翁の伯母て御坐います、何てすか女にしては聲が立つとか申して熱心に親達が仕込みましたが、極嫌ひて拾四まて稽古と云ふと御線香を立てられた位でしたイエ、唯今は少しも致しませんが、耳だけは巧者てすからピアノても、ヴワイオリンても、譜を見るのがまだるッこしい樣て、自分の勘てズンズン彈きますから、覺へは早いやうてすが、却て不可相てすよ、併し西洋人は不器用の爲めに叮嚀に譜を作つて置くのかと思ひます、一體私は歌よりも音色の方が好きなのです。

▲演劇　當節は實家の家庭とも違ひますから、トント參りませんので、從て嫌らひになりましたが、以前は可なり見ましたもので、却々感じが強い方でした、子役が出ますと何となく悲しくなつて、千代萩など何時も泣きました、考へると馬鹿〳〵しいのてすが、政岡だの又は鏡山のお初の忠義などを非常に感心して見物したのです、世話物は今日いくらも實際て見られますから格別……時代物の方が餘程興味が深いと思ひます。

▲動物　犬でも猫ても……云ふ中、犬の方が尙好きなのてす、鷄も少し斗り飼つて御坐いますし小鳥ても何ても一切家中揃つて好きて御坐います、主人などは動物好が進歩して人が好きです、人が好きッて何んてすか、よく人の世話を致すのを樂しみに致して居ります、私の動物好な事は、以前馬琴の俊傳實々記にまて感じました、

夫れはアノ猿が可愛相で涙を溢したのです、實に廉い涙だつて笑はれました。

▲食物　これは充分に趣味を申し上げたいのですが、生憎私はトント好き嫌らいが無くつて偏ッた嗜好が在りません、極とくな方で御坐います夫れて居て旨い物を料理して皆なに食べさせるのは極樂しみで、色々工夫して致して居りますが、自分は夫れを食べたいと云ふ慾がありませんてよく御鹽梅を忘れますよ。

▲衣服　人樣が立派に御着飾りになつたのを拜見するのは好きで、又女は奇麗にして居たいものだと、始終思ふことは思つて居りますが、扨自分は元から少しも構はないのです、つまり飾るのが下手なんですよ、夫れても見るだけては洋服と日本服と比べると私は洋服が宜しいと思ひます、平常は兎も角夜會などの時日本服は見られた物じやアありません、本當に家鳴が文庫を背負たやうですネ、改良會もドーなりますか知らん、報知の新案にも如何も感心したのが在りません、袴は一寸よい考へて特に振り袖に袴と云ふ姿はよい物ですネ。

▲裁縫　伯母が呉服の間を勤めて居た人て、隨分嚴しく仕込れましたが、一向出來ません、御細工物は少しは致しました。

▲髪　束髪好きて此方へ參つてから二三度しか丸髷に結ひません、前には始終櫛卷にして居りました、私は一人の兄が亡くなりまして丸て獨り娘の上に母がまめ人て一切世話をやいて呉れましたのが、癖になつて何でも自分の始末をするのが下手て困ります。

▲和歌　中島歌子さんに暫く御厄介になりましたが、年が行かないと云ふ所て特別に御歌所へ入れて頂いた次第て、唯今でも年に一

度御濱御殿へ上りますが、皇后陛下より御茶菓を賜はり、合作など致すと陛下から御催促で御使が御持かへりになります、イエ平生はモー相應に家事に忙しいので暇も御坐いませんし、想が浮びも致しません、和歌も左樣ですが、偶には何か筆を執つて見たいと思つても、道樂の傾きになりますから夜分主人も子供もふせつて仕舞てスツカリ用が片付いた後でなければ、自分の體になつて致す事が出來ません。

御話の興深きは私の紹介いたすまでもなく、著作時代の女史を想像さるゝ看客は、目を側てゝ女史の趣味の微を穿つことを御望みでせうが、拙い筆で萬一を盡せないのみならず、腦の御痛を御察じ申して疊みかけて伺ふ勇氣も挫け、寶の山に入ながらの喩も感じられて、殘り惜しくも御暇申し出て、尙御寫眞拜借を願ひしに。皆んな方々へ借して仕舞て御坐いませんが、僅一枚赤ん坊を抱いてるのが在りました。

御床の間の寫眞挾より取り出され十年程前のて、大分變つて居りませう、御書き下さいますなら御袖の下を遣ひますから、成るたけ美くしく願ひますオホ、、、、。

島田三郎氏家庭

島田夫人のぶ子は、横濱市なる西村喜三郎氏の長女にして、明治八年六月を以て生れ、同二十五年を以て衆議院議員、毎日新聞社長島田三郎氏に嫁し、愛國婦人會婦人矯風會及び禁酒會等に盡瘁しつゝあり。

霖雨漸く晴れて四五日以來にない溫度でしたが、彼岸の入りもこゝ兩三日と逼つた故か、メツキリと秋の氣色を現はして、中六番町な

る島田氏の御門を入りますと、紅白の萩が今を盛りと咲き亂れて居りました、書生さん四人ほど机を列べて勉強せられつゝある、御玄關より、洋書棚幾つか列べられた、廊下を通つて、一の應接室へ導かれましたが、御床の掛花活には朝鮮朝貌が風情優しく活けられてあり、葭戸越の御庭先には松、檜、青楓などが、枝と枝と擦れ合ふほどに茂り、垣に傍ふて、芙蓉や百日紅が咲き誇つて、木の間から漏れ來る光線を浴びて居りました、記者が坐に着くや否や、サッサと出て來られた、夫人は、スラリとした御體格で、御納戸子持縞の縮の浴衣白地に鈍革色の楓を散らした、友禪縮緬と黒繻子の巻夜帶を小さく結ばれ艶かな髪をアッサリと纏められた束髪は水際立つた額と配合美しく、二重の張りのある、御眼元を濃く秀てた眉に凛とした御氣象を表白され、締つた御口元に言ふべからざる愛嬌を湛へて寶石入の指環を嵌められた眞白の指先を揃へて慇懃に御挨拶あり、記者の請を幾重にも斥けられましたが、遂に否み兼ねられ……、

▲宗教　跡見女學校に居ります時分は、トント宗教の考へも御座いませんでした、尤も偶像を拜することは大嫌ひで御座いましたが、十五の年學校を出まして横濱へまゐり、英語を習ふ爲めに宗教學校へ通ひまして、教師ブリテンに就きましたところ、却々の熱心家で、禁酒禁煙の方には殊更力を入れた人で御座いました、其二階が飲食店(西洋の)で下が學校と云ふ組立でしたので、父が御辨當を其處で食べて來たら宜からうと申ので、左樣致した事が御座いましたが、ブリテンは酒を飲まずに水ばかり飲んで居りました、それから私も漸漸基督教の話を聽いて耳を傾ける樣に爲り、海岸や山手の教會へも日曜毎に出て說教を聽いて居りましたが、一個人に就いて導いて貰

つたとは御座いませんでした、さて種々世の中の有様を見ましても、宗教を信ずる方と信じない方とは品行から事業、それからチョットの演説まで大層相違があると存じて、信者になりたいとの希望は充分に持つて居つたのです。

▲洗禮　此家へ嫁つてから、宅では御承知の通り基督教熱心で御座いますが、私は眞成に宗教が解つたならば可いが今少し研究の上と存じて、却々容易に洗禮を受けませんでした、漸く一昨年になつて、私は矢島さんに精神を打明けまして、何卒導いて下さいと御頼み申した所、矢島さんは涙を流して喜んで下さいまして、今老體で毎日曜には出られないが、貴方の爲に必ず出やうと仰しやつて、夫から御引立下すつたゆゑ、追々心靈上の事も判る樣になりまして、日曜日には何樣な用事があつても繰り合せて出る事に定めました、併し洗禮だけは成るだけ信仰が固まつてからでなければと、宅でも申しまして漸と今年受けましたので御座います。

▲心靈の變化　私など未だ心靈の過ちばかり多いので、お恥かしう御座いますが、それでも無宗教の時と較べますと大層安心が得られると存じます、先チョット致したとでも、曾なぞて皆さんの立派な御服を見ると、女ですから欲しくなるとも御座いますが、直に考へ直してそれを求める金があつたら慈善にでもと存ずる樣に爲り、又毎晩祈りの時毎日の心の汚れを反覆して悔ひ改めますと、誠に清々と安心して眠られる樣な次第で何時も何時も心の悶なく送りますのは、此上もない幸福と喜んで居ります。

▲令息　二人の子供(長男孝一氏十一歳、次男悌二氏八歳)も日曜毎には日曜學校へ通はせて居ります、唯今の御若い方でも、信者の御

方の御話は自然高尚で、子供等に聽かしても至極宜しう御座います、けれども、信者でない方が何の氣なしに仰しやる藝妓とか娼妓とかチット御話の中に混りますと、子供があとで「母樣あれは何の事なんです」と問詰めますので返答に困ることが度々御座います。

▲禁酒會　宅で禁酒會に入りましてから六年になりますが、其前は政黨の御交際上から御酒も烟草も頂きましたので、私が何卒これだけはと始終頼んで居たので御座います、一體私はブリテンの薫陶から致して非常に此事を歎いて居る所でしたから、宅へも五月蠅く頼みました處、自分でも惡い事と氣が付いて居りますので、土曜日だけと定めました、併し折々其定りが崩れまして、木曜日なぞにも今日だけは勘辨して貰ふなぞと申す事もあり如何しても止め切に參りませんでしたが、女子學院で、松本荻江さんの追悼會の時、安藤さんが禁酒に就て大層よい演説をなさいましたのを伺つて、斷然禁酒會に入つたので御座います、それで安藤さんに、自分は今迄如何しても止め得なかつたが、毎度大學や專門學校へ入學する學生の保證人に立つた事がある場合に、其學生に向つて成るべく酒や煙草をのまぬ方が宜いと勸める、併し自分が平生飲んで居るから、何だか心恥かしい次第で年を取つてからは飲んでも宜いなぞとは言はれず、且つ我家の子供には親が飲んで居ながら戒める事も出來ず、非常に心苦しいと思つて居たことを述べて入會致したので私もそれから矯風會へ入りました。

▲酒の到來物　私の家では書生でも車夫でも一切禁酒と致して御座います、車夫なぞ餘所で飲むかも知れませんが宅では少しも飲みません(尤も料理の味淋だけは使ひます)それですから正宗のダースな

ぞ頂きました時無愛嬌とは存じますが、直に御返し申すので、置つ放して御歸りの方へは旅籠屋迄屆けて返上致します、如何か致すと汽車へ御立ちがけに麥酒など置き去らるゝ事があつて、實に當惑致します、車夫も禁酒致して居ますから遣れませんし、禁酒會員の家から他家へ麥酒を遣ひ物に致す次第にも參りませんし、據ろなく近所で懇意な人の車夫に飲んで貰ひます樣な次第で……。

▲禁煙　煙草盆を一切御客に出さぬが可いと、宅では申しますが、これば かりは御交際上不都合で出さぬ次第には參りません、御客樣の中には隨分葉卷を吹かしながら御入來の方も御座いますからネ。

▲御飯　人樣が御入來ても、御飯時分に仕出し屋から取ると云ふとは決して致しません、手料理を差し上げるとに定めて置きますが、其代り初めて御入來の方でも、時分が來れば何でも有合せで差し上げる事にして、家族一緒のテーブルで樂しく食べる樣に致します、子供も矢張り御一緒に食べさせますから、子供が自づと食物に就いて好嫌ひの我儘を言はなくなります。私の鄕家では何故か御飯の時苦情が多く、御飯が剛いの柔いの御副食が甘いの辛いのつて、三度三度女中に八釜しく申して居りましたのを、私は始終厭な事だと思つて居りましたが、宅では小言大嫌ひですから、御飯の時には如何な事があつても、決して文句を言はぬ事と定めて御座います、それですから鄕家の女中は氣が利いて居りますが、私共の召使は何時までも、下手で御客樣の前へ出しましても、失禮ばかりでこれには困りますよ。

▲儉約　『あなたの處では嗤經費が掛るだろう』と皆樣がよく仰しやいますが、ホントウに心を放したら限りはありませんので、直ぐに